

531

31



始



エト6E-80

訂校

おもろさうじ

大正十四年校訂刊行

第一—第八

531-31



伊波普猷校訂

訂校
もろさうし

南島談話會刊行

大正
14. 10. 2
内交

序

口碑によると、尙眞王が各地の按司部(諸侯)を首里に聚めた時、各地のオモロをも纂めて、神歌主取おもしろぬしとりといふ役を置いた、といふことであるが、この事は琉球の正史にはもとより、その他の史籍にも見えず、向氏具志川按司の家譜にはの見えてゐるだけである。煩を厭はず該家譜の記事を左に引用することにしよう。

尙眞王性質英明、謙己受益、及其長成、能繼先志、善述父業、務精于治、百僚分職、群臣授官、簪以金銀冠以黃赤、而定貴賤上下之分、設朝儀于朔望列拜于左右、而定大小朝儀之禮、又舊制分地封按司、由是各處據城地、互相爭伐、兵亂不息、王始改定制度、諸按司皆聚居首里、解散兵柄、遙領其地、歲遣官一員治之、國以安然、又遣第三子尙韶威、遵舊制監守山北、稱今歸仁王子、而其子孫繼守山北受襲職按司、

至康熙年間、尙眞王以山北安寧之故、始命移居于首里、

弘治年間奉命赴山北時、蒙尙眞王特賜御脇指二振一銘備前長光一銘相州秋廣御鎧通一本黃金保伊波武御盃一個御盃臺一個金織緞紳一條、且蒙賜唄雙紙一冊、每節行禮、蓋山北節々有神

出現、其禮最重、故尙韶威監守以來、世率家族以此禮、又王都遣唄勢頭三四人、與彼土唄勢頭俱行禮式、此時有有阿應理屋惠按司世寄見按司宇志掛按司吳我阿武加那志女官掌此禮式、崇禎年間(萬曆年間の誤)逢兵警此禮俱廢、但阿應理屋惠按司之職立今尙存、每節行禮。
康熙年己丑、王城回祿、失唄雙紙時、以所傳唄雙紙呈覽而備公補之用。

前半は『球陽』の記事を引用したもので、別に耳新しくもないが、後半は全く初つ耳で、『おもろさうし』の研究上見逃がす可からざる記事である。それから其の家譜には、雍正八年に、琉球で古今獨歩の政治家といはれる具志頭親方蔡温が序文を書いてゐるのも注意すべきことである。當時は尙眞王時代を去ること餘り遠く無い時代で、口碑や記録なども澤山遺つてゐたらうから、この家譜中にある神事や『おもろさうし』に關する記事は比較的正確なものと思なければならぬ。

尙眞王以前の琉球人は、所謂邑落生活を營んでゐたが、これら氏神を中心として集まつた邑落民に取つては、政治は即ち祭事であつたから、集會のある毎に、そのオモロの詩人たちは、日本上古の語りべのやうに、神事に關する叙事詩を眞人部(民衆)に謠つて聞かせたに相違ない、そして各邑落はそれ／＼の『おもろさうし』を有つてゐたに相違ない。尙眞王の中央集權で、各地の按司部が首里に引越していつた時、彼等がそのオモロの詩人を一しよにつれていつたこと

は想像するに難くない。この時代は兎に角各地方古今のオモロを蒐集するに最も都合のいい時期であつた。尙韶威が監守となつて北山へ出かけたとき、父王から貰つたといふ唄雙紙一冊は、多分其の頃に編纂されたものであらう。ところがこの唄雙紙が、慶長の役よ今歸仁城が兵火よ逢つた時、助かつたかどうかは、記録も口碑も之を語つてゐない。

『おもろさうし』の總目錄の日附を見ると、首里王府では、それから二三十年後、明の嘉靖十一年、我が天文元年、尙眞王の子尙清王の即位五年に、オモロの第一回の結集をやつた。それが即ち『おもろさうし』の第一卷である。それから八十年後、明の萬曆四十一年、我が慶長十八年、尙寧王の即位二十五年の五月二十八日に、第二回の結集をやつた。これが即ちその第二卷である。それから十一年後、明の天啓三年、我が元和元年、尙豊王の即位三年の三月七日に、第三回の結集をやつた。第三卷から第二十二卷までの二十冊が即ちこれである。試みにその目錄を擧げて見ると、

- 第一 きこゑ大きみがおもろ首里王府の御さうし
- 第二 中城越來おもろ 首里王府の御さうし
- 第三 きこゑ大きみかなしおもろ御さうし
- 第四 あおりやゑ さすかさのおもろ御双紙

- 第五 首里天ぎやまへあんじおそいがふし首里おもしろ御さうし
- 第六 玄より大君 せんきみ 君かなし もゝごふみあがり きみのつんしのおもしろさうし
- 第七 首里天ぎやまへあんじおそいがなしとひのおもしろ御さうし
- 第八 首里天ぎやすへあんじおそいかなしおもしろねやがり あかいんこがおもしろ御双紙
- 第九 首里天ぎやすへあんじかなし いろ／＼のふねりおもしろ御双紙
- 第十 ありきゑごのおもしろ御さうし
- 第十一 首里ゑごのおもしろ御さうし
- 第十二 いろ／＼のあまびおもしろ御さうし
- 第十三 船ゑごのおもしろ御さうし
- 第十四 いろ／＼のゑさおもしろ御さうし
- 第十五 首里天ぎやすへあんじおそい うらおそい きたたん よんたむざおもしろ御さうし
- 第十六 首里天ぎやまへあんじおそいかなし 勝連具志川おもしろ御さうし
- 第十七 恩納より上のおもしろ御さうし
- 第十八 首里天ぎやすへあんじおそいかなし玄ま中おもしろ御さうし
- 第十九 ちゑねん さしき はなぐすく おもしろ御さうし

第廿 くめすおもしろ御さうし

第廿一 くめの二まざりおもしろ御双紙

第廿二 みおやだいらおもしろ御双紙

第一回の結集といふと、尙眞王の中央集権を去ること二三十年後のことであるから、按司部が首里より引越した時よ、銘々の『おもしろさうし』を携へていつたとすれば、この時既に各地方のオモロが集まつてゐた筈なのに、漸く「きこゑ大君がおもしろ首里王府の御さうし」一冊が出来ただけで、それから一世紀も経つて、島津氏の琉球入後よ、各地方のオモロが集まつたのは、注意すべきことである。おもふに、中央集権よよつて、政治的に統一された琉球は、宗教的には十分よ統一されないで、各地方で氏神を中心とする邑落生活がまだ衰へなかつたから、その領主が去つて了つた後でも、その神事よ關する儀式は不相變舉行されて、『おもしろさうし』なども、大事に保存されてゐたであらう。慶長年間に琉球を訪問した日本僧袋中が『琉球神道記』よ、百年以來民風大よ變じ、神恠の事今は即ち絶ゆ云々、とあり、又『球陽』及び『開得大君御殿並御城御規式之御次第』よ、宗教上重要な意義を有つてゐた國王並に開得大君の隔年一次の久高島參詣が、島津氏の琉球入後政務多忙の故で全廢されたといつたやうな記事があるのを見ると、琉球入後、社會の激變よつれて、宗教上の儀式なども變動を免れなかつたことが能くわかる。かうい

ふ時期に際して、オモロの第二回第三回の結集があつたのは、實に喜ぶべきことである。あの時
どういふ方法で蒐集したかは判然せないが、首里王府では各番所(役場の義)も命じて之を蒐集
させたに相違ない。そして各番所では吏員を其管轄内の祝殿内(のふさのち)に派遣して、おもしろ帳を筆記さ
せ、或は祝女が口づから傳へたものを筆記させて、王府に提出したに相違ない。これらの番所
中では、控へを取つて置いた所とそれを取つて置かなかつた所とがあつたであらう。かうして各
地方から集まつて来たものを取捨選擇して、首里王府では、今日我々が見るやうな『おもしろさ
うし』を編纂した。『おもしろさうし』を通讀する人は、時代より地方より、オモロの言葉遣
ひと假名遣との異なるものがあるのを發見するであらう。オモロの編纂者が私見を加へない
で、ありのままに傳へてくれたのは、オモロの文法及び音韻の歴史的・比較的研究を企つる者
よ、大なる便宜を與へてゐるといはなければならぬ。

『おもしろさうし』二十二冊の中で、詩歌としてすぐれてゐるといふのでもなく、又史實を多く
含んでゐるといふのでもないが、オモロの研究上特別の價値を有つてゐるのが二冊ある。それ
は第九卷の首里天ぎやすへあんじおそいがふしいろくのあねりおもしろ御双紙と第二十二卷の
みおやだいらのおもしろ双紙とである。前者はオモロを舞合はせて謠つたことを證明してくれ
るもので、その所謂間書(註のこと)に、「二ておすこねる」「ひたり二ておすなかにおしかけ

て おしひらちへ うちあける おち二てこねる」「おしかけて おかて こねて おうのきり
して 二ておちへ二てこねる」「はねみきり二ておちへ こねて ひたり一てこねる」「二てお
のきりしてみきり一てまうて二てこねる」「ひたり一ておちこねて みきり一ておちへこねて
なかにたゝこねる」「うちのちやけて こねる」「おしかて あへをかて おしおそちへうちあけ
る」「みきり二ておちへ ひたりおしかけておのきり」といふやうなことが見えてゐる。その意味
は判然せないが、舞ひの仕方を書いたものであることは確である。田島利三郎氏もその「琉球
語研究資料」中よ。

琉球よては、上世よりコネリと稱する舞あり。シノゴといふものもありき。是等はオモロ或
は歌よ和する簡單なる舞なり。組踊以前よりありては、踊といふもの稍發達し、番組を作りて
演奏し、宴席の興を助けしめしが、猶玉城朝薫の作戲の命を受けしと聞くや、踊が物言ふこ
とやあるとて、人擧りて嗤ひしといふ。然れども、演ずるに及んで、皆感嘆の涙を禁めあへ
ざりしとぞ。

と言つて居られるが、今日の琉球の舞及び組踊よコネリの分子の流れてゐることは、想像す
るに難くない。あのオモロを編纂した頃まで、オモロをコネリよに合せて謠つたことは明であ
る。コネリはこねら、こねり、こねる、こねれ、と活くもので、シノグと同意義の言葉である。

古くは、この双紙ばかりでなく、オモロ全體が舞は合せて謠はれたに相違ない。この時鼓を叩いて之を和したことは拙著『おもろさうし選釋』中の、「鼓をうたつたオモロ」の條よくはしく述べておいた。それから後者はその名稱の示す通り、公事のおもろ双紙で、四十七首悉く謠はれたものらしいが、近代になつては、(一)五月稻の穂祭と(二)六月稻の大祭と(三)唐船の進水式及び御茶飯と(四)冠船劇と(五)雨乞などに謠はれただけで、總べて八九首しか謠はれなくなつた。古くはこの双紙ばかりでなく、オモロ全體が、あやでやついみよ合せて、謠はれたことも亦想像するに難くない。つひ三四年前なくなつた舊おもろ主取安仁屋眞莉翁は、その家が祖先以來、オモロの謠ひ方並に其に關する儀式等を傳へ、それからおもろさうしの敢佚を守る役であることを堅く心し銘してゐたので、私が訪問する都度、オモロを謠つて聞かせたばかりでなく、みおやだいらのおもろさうしの發音を私に教へてくれた。そして私は爾來この發音法よつて、オモロを読むことにしてゐる。オモロの謠ひ方よつては、たゞ謠曲の影響を受けたものである位のところがわかつただけで、一曲も覺えて置かなかつたが、その後琉球音樂の研究著者山内盛彬君が悉く譜に取つてくれたのでよかつた。安仁屋翁は間もなく此の世を去つた。

少しく横道に這入つたが、オモロの第三結集後二十八年即ち慶安三年に、首里王府では、正史『中山世鑑』の編纂があつた。この時オモロが史料の一になつたことは疑ふ餘地がない。世鑑よ

オモロが二三ヶ所引用されてゐるのを見ると、羽地王子向象賢が『おもろさうし』を繙いたことは確である。すつと後編纂された『佐銘川大ぬし由來記』や『夏氏先祖由來傳』などにオモロの引用されたのを見ると、民間で之を繙いてゐたものゝゐたことがわかる。けれども『おもろさうし』の中は、所謂逆臣阿麻和利を謳歌したオモロが澤山出て居たり、其他研究したら、どんなのが飛出して來るかわからないので、當時にあつては、おれは恐らく危険思想の本と思はれてゐたであらう。そして王代記などの傳播が遮られてゐたのと同じな理由で、一般には見せられなかつたであらう。首里王府の手で纏められて、間もなく各地方で忘れられたオモロは、王府の書庫の中で、空しく紙魚の餌となるほか道がなかつたのである。『夏氏先祖由來傳』に引用したオモロを見ると、著者が王府で編纂した『おもろさうし』を繙いたことは明であるが『佐銘川大ぬし由來記』に引用したオモロの字句や假字遣が『おもろさうし』のそれと少々異なるところのあるのを見ると、この書の著者は王府で編纂した『おもろさうし』とは異つた本を繙いたのではないかといふ氣がしてならない。試みよその一二首を擧げて見よう。尙巴志の誕生を謳つたオモロ(第十九卷の十章)に、

佐敷苗代よ

まて物まもの

眞玉の

とむやがるみしや

といふのがあるが、『おもろさうし』は第四句が「とりやがる、みしやご」よなつてゐて、その次にもう一句「もたいなわしろよ」といふのがついてゐる。オモロの原本では、りどもとが能く混同するから、「とりやがる」のりはことによると、もでは無いかと疑つてゐたが、この「とむやがる」のお蔭で、原本の「とりやがる」を「ともやがる」よ訂正することが出来て、これよ飛上るの意味のあることまで判然して來た。それから今一つ、

てどこんの大比屋

たうの道あけて

てどこんす

御府の内や豊む

といふのがあるが、原本よは第四句が「にはんうちに、とよめ」となつてゐて、その次よもう一句「てどこんの、さどぬし」といふのがついてゐる。これで見ると、この書の著者の時代まで、佐敷邊に「さしきのおもろさうし」の異本のあつたことがわかる。

『球陽』によると、永曆十四年我が萬治三年の九月十七日の子の時よ、首里城の宮殿が焼けて、

貴重品や古記録が多く失はれたが、『おもろさうし』は僅よ其の難を免れた。ところがそれから五十年後、即ち康熙四十八年我が寶永六年よ、再び首里城よ火災があつて、百浦添(正殿)及び南北兩殿が悉く焼燼に遭つた時、『おもろさうし』も烟となつて了つた。右に引用した具志川御殿の家譜よ見えてゐる通り、今歸仁家では早速所傳の唄雙紙を獻じて、公補の用に備へたといふことである。さてあの所傳の唄雙紙は、弘治年間に尙韶威が、山北の監守として赴いた時よ、持つていつたあの唄雙紙のことであるか、それとも其後首里王府から配布された『おもろさうし』二十二冊のことであるか、あの文句だけでは判定しかねる。が、前後の關係から推定して見ると、前者ではなくて、後者であるらしい。

『おもろさうし』が焼失した翌年、康熙四十九年、即ち我が寶永七年よ、首里王府では、『おもろさうし』を書き改めてゐるが、その卷末に次のやうなことを附記してゐる。

首里天尙益王かなし乃美世にみおみ事(勅の義)をおがみ(奉じの義)

おもろ御双紙二部書あらため申壹部は御城よ御格護壹部之言葉間書

(註の義)よ調おもろ主取乃かたへかくごおよせめされ(命せられの

義)候

嘗大清康熙四十九年庚寅七月三日

序

一一

攝政

越來王子朝奇

三司官

識名親方盛命

幸地親方良象

池城親方安倚

奉行

津嘉山按司朝睦

主取

座間味親雲上景典

津瀬親雲上實昌

立津親雲上全明

筆者

伊良皆筑登之親雲上重休

並里筑登之親雲上嗣喜

瑞慶田筑登之親雲上正方

小渡筑登之親雲上元敷

嘉數子宗宣

おもしろ主取

宜野灣間切大山村

安仁屋親雲上

こゝには見えてゐないが、具志川按司家の家譜によると、今歸仁家から獻じたといふ『おもしろさうし』から書き寫したことは明である。祭政一致時代には、今歸仁家はかなり重要視されてゐたから、『おもしろさうし』の結集毎に一部づゝ配本を受けたことは想像するに難くない。あの時もし今歸仁家所傳の『おもしろさうし』がなかつたら、琉球の聖典ともいふべき『おもしろさうし』が、その書名だけを留めて湮滅したのかと思ふと、具志川家の家譜はオモロ研究上一入価値のある史料になるわけである。ところが私は當時これが唯一の『おもしろさうし』であつたとは信ずることが出来ない。『雜公事帳』乾隆廿八年の條に、神歌人數代合かほりあひ之事が見えてゐるが、その中に、

一、神歌人數之儀此程勢頭方江召授置候處其通よては差支候譯有之由神歌主取依申出此節より御双紙の庫理構ニ申渡候事

一、神歌主取之儀、御双紙等見開曲數不殘相傳仕惣中江傳授させ候勤職にて代合仕候ては、差支候故、定役被仰付置候付人柄等其見合無之候て不叶事候、右付て代合之節は御双紙庫理より人體相調部申出候三司官印押清書させ言上仕候事

一、同親雲上儀三拾六ヶ月相勤七ヶ月め、代合仕候右に付神歌親雲上江其勢頭より進勢頭江は相附より進候付代お、かす(申請の義)同主取より申出候節は手札並其村之掟地頭代其當人手札無相違通證文面付帳取添御双紙庫理取次申出候えば手札言上寫等引當候段お、かす書致端書御双紙の庫理名印を以懸指露及言上相濟次第則々面付帳ニ相記三司官印押可申事
但病氣又は何歟ニ付斷申出候共三拾六ヶ月内と取揚申間敷候

一、同相附之儀お、は(補缺の義)之内より三人最寄書を以同主取より申出候ハ、御双紙の庫理相調部懸被露面付帳に相記三司官印押可申渡事

一、同お、は拾貳人面付帳無之ニ付此節より相調相渡置候間向後代合之節ハ別ニ面付帳ニ相立御双紙庫理印押置相附進候節右帳取添差出候ハ、見合を以可申渡事

一、お、は代合之節茂相附同前手札證文取添兩三人寄書を以お、かす申出候ハ、御双紙庫理印紙を以可申渡事

一、神歌人數勤方之儀専下庫理方御規式相携候付諸御用等之通達ハ却而此内之通勢頭方構

申渡候事

といふことがある。又乾隆四十八年の日附のある『おもろ主取日記』も、

右通元祖之由來相傳仕候然者元祖之光を以代々神歌主取役被仰付御扶持被下座敷御位迄頂載可仕旨難有尊敬仕候尤主取役之儀者必此元跡目子に可繼させ候子孫之者此趣旨承知仕おもろ御双紙見開講釋又者おもろの曲數無傳失可相勤候是先祖之孝行可專要事

附、主取役之儀諸事正敷執行仕不申ハ不叶役目にて候間何篇義理正道よしておもろ稽古人繁榮仕させ候様能々可念入儀可專一事

といふ事がある。乾隆年間といへば、あの火災後であるから、或は神歌主取の職が『おもろさうし』の保存を切ら感じ出してから、設けたのではないかと疑ふ人があるかも知れないが、あの火災より二三年前即ち清の康熙四十五年、程順則等の碩學よよつて編纂された『琉球國中山王府官制』よ、

神歌長 一員

神歌 主取

神歌協長 三員

神歌 親雲上

とあるのを見ると、この職の古くからあつたことが明白である。『おもろ主取家元祖由來記』によると、その祖先の謝名具志川親雲上は、もと伊平屋島の人で、尙圓王と多少姻戚關係のあり、

尙圓が災難に遭つた時、伊平屋からうまく逃がしてやつた功によつて、後年取立てられた人であるが、この人の孫がはじめて神歌主取に任せられて、安仁屋の地頭封せられたといふことである。そして爾來おもしろ主取の職は彼家の世襲となつて、明治十二年までつゞいたのである。兎に角おもしろ主取の職が、『おもしろさうし』が始めて編纂された頃置かれたものであることは推測するに難くない。既におもしろ御双紙見開講釋又者おもしろの曲數無傳失可相勤候職である以上は、朝夕『おもしろさうし』と親しんでゐなければならぬ。『おもしろさうし』を編纂する毎、今歸仁家より一部づゝ配布したとしたら、おもしろ主取家には、なほさら配布しない譯もいかなかつたらう。かういふところから考へて見ても、今歸仁家所傳の『おもしろさうし』は、王府のそれが焼失した後遺つた唯一のものではなく、それが一部おもしろ主取家にもあつたと推定することが出来るのである。それでは王府の同双紙が焼失した時、何故におもしろ主取家のものを獻じさせないで、今歸仁家のものを獻じさせたかといふと、おもしろ主取家では同双紙は王府以上に必要であつたが、今歸仁家は此頃山北安寧の故を以て、尙貞王の命で首里に引上げてゐたから、同家より同双紙が左程必要がなかつたからである。

『おもしろさうし』の卷末の文を見ると、同双紙を書き改めて、一部は本文のままのものを王府に保存し、一部は言葉間書コトガエノカキ（註の義）を入れて、おもしろ主取家に保存させたといふことであるが、

この時今歸仁安仁屋兩家の双紙を校合したのは勿論のことである。琉球の習慣として、系圖その他の古記録などを書き改めると、原本は早速焼き棄てるといふことになつてゐたが、この時安仁屋家並に今歸仁家の原本は多分焼き棄てられたであらう。

『おもしろ主取家元祖由來記』を見ると、安仁屋家よりは、おもしろ神といふ神が祭つてあつて、この神の時々安仁屋家の神人の口を通して、おもしろ主取家の事件に就いて注意を與へるといふやうなことがある。試みに之を引用して見よう。

右元祖由來並御神事之次第本文並朱書を以委曲書流置候處永々元祖跡目相成申次第安仁屋筑親雲上次男むた義嘉慶二年丁巳正月五日より不快の様相見え候處時々俄に息引入貳時程少も不通其以後五體引張り相絶段々危氣色最早半死半生涯り相成候事多々之有候付時よた（呪巫のこゝ）に占方杯仕候ハ、別而病強く罷成至極驚入申候處二月十五日比より御神御言葉おどし（神託の義）始四月迄には上座に朱書を以御神事欠目御水など又元按司わかれ昔おもしろ大御神段々奇妙成事被仰聞候尤神事並元祖彼是細々不殘御ぎしの通上座本文並朱書に相見得候間若於以後一門より時よた又は占事有之右次第書之外例替杯又ハ例引入申出候共曾而取持間敷候尤伊平屋島之御神加那志おもしろ御神加那志御兩人組手合し（祈りの義）召れ諸事欠目有之候處御直に御ざし被仰聞候間永々右書置傳失相守候儀肝要之事に候且又此元子孫より餘之御奉

公相勤させ候ハ、則御神より御答よ逢候間御双紙見開講釋おもろ曲數傳受候

かういふ状態であつたから、代々のおもろ主取は、神意を畏れておもろの意味、謠ひ方、及び其に關する儀式などを間違なく傳へるやうに、努力したのである。

それから所謂言葉間書を見ると、頗る簡單で、それだけでは到底今日のオモロ研究者を満足させることは出来ないが、それはこの頃までは古語を解する人が多くて、別にくだい解釋を施す必要を見なかつた爲ではあるまいか。その校訂者等がオモロを能く解してゐたことは、その翌年彼等が編纂した琉球古語の辭書『混効驗集』を繙いたらわかる。この書は乾坤二卷に分れてゐて、乾集は、乾坤・人倫・時候・支體・氣形・草木・器財・家屋・衣服・飲食・言語といふ順序に、坤集は、乾坤・神祇・人倫・器財・氣形・草木・時候・衣服・數量・支體・飲食・言語といふ順序に排列されてゐるが、乾坤二冊に千餘の語彙を集めて、其意義出所をも示してゐる。琉球で内裏言葉を集めた書といふのは是である。その用例之殆ど『おもろさうし』の中から取つてゐるから、オモロの辭書といつても差支ないのである。そしてその序文には、かういふことが書いてある。

夫我朝は神國御本地辨財天なり昔は御神出現有て善惡あらはし給ふとなり去よりてみせ、るの言葉を俗語とする故優にして美盡せり然といへども世遠してやゝ減少するが故よ

尙貞尊君寂慮あさからぬ事 被思召言葉を撰べこの宣旨を下し給へとも果してゑるものなし

時よ

尙賢尊君御宇下つた三代よ使奉る一人の官女あり遺俗風流の言相覺えられしを集神歌の詞を撰且古老の口號を聞て都て冊となすもの也

そしてそこには攝政・三司官・奉行・主取・筆者の署名がしてあるが、特に注意すべきは三司官

(即ち國務大臣)中の故參毛起龍識名親方盛命の名である。『中山王府相卿傳職年譜』によると、

彼は尙貞王世代康熙四十一年の十月二十四日三司官に任せられ、尙益王世代康熙四十八年の十一月十八日紫地浮織を賜はり、同五十年の七月三日に致仕して、十一年間も三司官の要職にゐた人である。彼は政治家であると同時に文學者であつた。而も彼は琉球よ於ける和歌の鼻祖といはれた人で、康熙二十七年、進貢使として支那へ赴いた時、北燕の風物を三十一文字で咏じたこともあつた。同二十九年薩州よ使した時、帝都の話聞き、是非一度漫遊して見たいといふ氣よなつたが、當時國々の關門が堅く閉されて、僧侶の外は容易よ通過することが出来なかつたので、剃髮して瑞雲と號し、密よ京都よ遊んで、その制度文物を視察し、徐ろに和學の研究よ没頭したといふことである。彼の著作の『思出草』はこの時のことを書いたもので、恐らく琉球人が和文で物した最古の紀行文であらう。日本文學の研究者であつた彼は、もとより自國文學の熱心な研究者であつた。『混効驗集』で、オモロの文句を説明するに、源氏物語や吳竹集

などの文句を引用して比較したところなどを見ても、オモロの言葉間書や「混効驗集」の編纂が彼の主唱によつてなされたことは疑ふ餘地がない。それから筆者の津覇・立津・瑞慶覧（「おもろさうし」の書後の署名には、瑞慶田となつてゐるが、これは多分瑞慶覧の書きそこなひであらう）の三人の名は、「おもろさうし」の巻末にある筆者の署名中も見出されるから、彼等は識名親方の助手として働いたる重なる人々であつたに相違ない。實は識名親方は非常な才腕を振つて顕著な功績を挙げたが、彼が琉球文獻學上よなした功績は、恐らくその外のどれよりも大なるものであつたらう。今日の南島の研究者が古琉球の言語と思想とを研究するの便利を得たのは、全くその人のお蔭といつて差支ない。識名親方の名は、南島研究の續く限り、記憶されるであらう。

かういふやうにして、オモロの註が出来、オモロの辭書も編纂されたが、オモロ研究は盛んにならないで、明治十二年の廢藩置縣に至つた。置縣當時、日本政府が琉球の古記録を全部取上げるといふ噂さが立つた時、尙家で大急ぎで安仁屋家のオモロを寫し改めて、副本を取つたのである。それから丸岡莞爾氏（明治二十一年九月十八日沖繩縣知事）に任じ、二十五年七月九日高知縣知事に轉ず、在職三年十一月）が沖繩縣知事在職中に、琉球史料六十餘冊を編纂したが、この時安仁家所藏のオモロの副本から書き寫して、その中に加へたのである。これは廢藩

置縣の騷擾の際、寫し改められたものによつて寫したものの故、寫しひがめた處もあり、脱漏したところもある。又かうして寫した「おもろさうし」から寫して、東京へ送つたのが二三部あると聞いてゐる。仲吉朝助氏所藏の同双紙も亦これからすきうつしたとのことである。

明治二十六年に至つて、オモロ研究の先驅者田島利三郎氏は、漂然沖繩をやつて來られた。氏の「琉球語研究資料」の緒言の冒頭に、かういふことが見えてゐる。

明治二十四年、余は、余が學友にて暫らく琉球の師範學校に教師たりし人より、彼の地には五十卷ばかりの琉球語もて記されたる文書あり、而かも、今は如何なることを記載せるものなるかをだに、詳にする者なしといふことを聞きたり。爾後、其の事念頭を去らざりしに、二十六年に至りて、余も亦暫らく琉球に居住すべき身となりぬ。到着するや、直に、彼の五十卷ばかりの文書のことを問ひ試みしかども、固より、其名も知らず、有無さへ實は確ならざる程の、極めて空漠たる間なりしが故に、一年餘すぎたの後も、猶聞き出すことなかりき。二十七年に至り、偶小橋川朝昇といふ人の編纂せし琉球大歌集を見しに、其の凡例に、一神歌は御唄ナリ、遠キ神代ノ昔ハ、コレヲ以テ、天地ヲ動シ、鬼神ヲ泣シムトカヤ、然ルニ、末ノ代ニ至テハ、適職官（神歌主取のこと）ト雖モ、往古綴リオキシ成句ヲ唱フルノミニテ、其意趣ハ何物タルコトヲ知ラザルゾ嘆カシ、セメテ、今傳フルモノサヘ失ハズシテ、

古ノ道ニ心ヲ盡サバ、好古ノ君子ト云フベシ。

とあるを見、始めて、琉球にオモロと云ふものあることを知れり。然れども、本文神歌と題せる下には、唯だ餘白をおきたるのみにて、其の一をだに記さざれば、残りおほきことに思ひたりしに、後、沖繩縣廳にて編纂せし琉球史料を閲して、オモロ御双紙二十二冊を得たり。五十巻ばかりの文書とは、即ち、之を言ひしなりけりと、是よりは、其のオモロ御さうしの研究に着手せり。

この年言語學者のチャムバレン氏も琉球にやつて來られたが、その琉球文典の緒言を見ると、氏は尙侯爵家所藏の『おもろさうし』二十二冊を一瞥し、一種不可解の韻文として、敬遠されたやうである。我が田島氏は實にこの不可解の韻文を解くべく努力された。氏は尙侯爵家所藏のテキストを寫す爲に、長い間侯爵家に出入して居られた。氏の『おもろさうし』の表紙を見ると、明治二十八年三月十四日といふ日附があるから、之を以て謄寫を完了した日とすることが出来る。そして最後の巻の終りに、「明治二十八年五月十七日初校了」と朱書し、又「二十九年十月二十五日舊おもろ主取安仁屋家ノ二本ニ依テ校合」と書いてある。氏が「おもろさうし」を見出したのは、沖繩に赴任してから一年後であつたが、もうその頃、氏にはオモロを解釋する準備が十分に出來てゐた。氏はその土地を研究するには、何よりも先にその言語に精通しなけ

ればならないといふことに氣がついて居られたので、到着早々から琉球語の研究に没頭された。そして一年も経たないうちに、琉球人と同じやうに、その方言をあやつることが出來た。それと同時に、歌謠や組踊(脚本)の研究なども怠らなかつたから、琉球人以上にその古語に通じてゐた。そればかりではない、氏は琉球音樂の研究にも指を染めてゐた。驚いたことには、琉歌まで作つた。氏は琉球人と同様に話し、又同じ様に感ずることが出來たから、琉球研究者としては十二分に成功すべき資格を備へてゐた。氏はひまさへあれば、田舎や離島に旅行ばかりしてゐた。かういふやうにして琉球人の生活に觸れることが出來たから、チャムバレン氏が一種不可解の韻文として匙を投げたオモロを、容易く解釋することが出來た。私のところに、氏の「配流餘材」といふのがあるが、明治二十七年の十月十五日から着手したもので、萬葉集中の古語と琉球語とを比較したものである。四巻までの出來上つてゐるが、學者の參考になるものが多い。これには別にくわいふややらしなども集めてあるが、餘白のところには、(一)緒言(二)琉球(三)文學(四)おもろ(五)主取(六)琉球語と日本語との比較(七)上古の言語(八、九)解釋(八、王府、九、地方)(一〇)結論といふ目次が書きつけてある。これを見るとき、氏がオモロを研究しはじめた頃に、將來かういふ風にして發表して見たいと計畫したことがわかる。それから今一つ「隨感隨録」といふのがあるが、これは明治三十年の七月三十日に着手し

たもので、オモロの語彙の未定稿である。これを見ると、氏が他日オモロの辭書を編纂しようとしてゐたことがわかる。その卷末の餘白に、(一)琉球略史(二)信仰(三)おもろに對する觀念おもろ主取(四)おもろの文法(五)修辭上の評論(六)おもろの本文(七)おもろの語釋及び出所(八)おもろの語と琉球語との比較(九)日本語と琉球語との比較(一〇)琉球開闢説及び創世記論といふ目次が書いてある。この方は「配流餘材」にある目次より三年も後に出來たものであるが、この頃氏の研究は大ぶ進んでゐることがわかる。又外の餘白の所に、琉球の神歌・琉球に對する一般の憶斷・徳川時代の碩儒の著書の誤謬其理由・特殊の歴史といふやうなのがあるが、これらは多分その頃の琉球新報に載つてゐるだろう。それから「隨感隨録」の表紙の裏に、琉球文學・琉球史・清少納言・源實朝・よしや・思鶴・琉球の三傑・五十音圖・琉球内裏言葉・島津氏の琉球入・琉球廢藩始末などと書いてあるが、その中には、私が原稿で讀んだのもあり、新聞に載つたのを讀んだのもある。

明治三十年、即ち私が東京に遊學した翌年、田島氏も上京して、一時雜誌「國光」の投書家になつて居られたが、三十年の新年號に、「琉球語研究資料」といふ一篇を投じて、琉球を紹介された。その目次を擧げて見ると、緒言、(一)おもろ(二)おたかへの詞(三)御拜みはいつつ(四)碑文(五)おもいくわいにや(六)歌(七)組踊(附)先島の歌、文字と發音とについて、などである。これは

田島氏が琉球語を研究しはじめてから、四年後に書かれたもので、氏が蒐集した「琉球語學研究材料」の解題ともいふべきものであるが、見やうによつては琉球文學研究資料ともなるであらう。この一篇は今年の七月に、「琉球文學研究」といふ名で、那覇市の青山書店で出版されてゐる。

三十六年に、私が帝大の文科に這入つた頃には、氏は日本女學校で教鞭を執つて居られたが、私が言語學を修めると聞いて大さう喜ばれた。そして私の家に暫らく厄介になつてゐた返禮として、數年間苦心して集めた「琉球語學研究資料」を悉く私に譲り渡し、他日その研究を大成してくれといふことになつた。私はその頃醫科大學在學中の金城紀光君と三名で、本郷西片町に一軒の家を借りて、自炊をしてゐたが、琉球研究の手始として、毎日少しづつ、オモロの講釋を聽いた。二三枚位も進んだかと思ふ頃、氏は突然東都を去つて、臺灣へ行かれたので、私は非常に失望した。私は已むを得ず、オモロの獨立研究を企てたが、さながら外國の文學を研究するやうで、一時は研究を中止しようと思つた位であつた。けれどもオモロが如何に解し難い韻文だといつても、もつと自分等の祖先が遺した文學であつて見れば、研究法さへよければ、解せないことも無いと思つて、根氣よく研究を續けた。其頃考古學の講義で聽いたフランスの學者がロセツタストーンを研究した話などは、私の好奇心を高めるに與つて力があつた。

それから私は琉球古語の唯一の辭書『混効驗集』の助けによつて、オモロを讀み始めた。一年も経たない中に、半分位は解せるやうになつた。それでいけないところは、田舎や離島の方言の助けによつて讀んだ。二年も経たない中に、七八分通り解せるやうになつた。三十九年に、私は大學を卒業して國に歸つた。私の専門の知識は如何がはしいものであつたが、私は兎に角オモロのオーソリチーとなつて歸つた。この通りオモロがわかりかけると、今までわからなかつた古琉球の有様がほの見えるやうな心地がした。私は歴史家でも無いのに、オモロの光で琉球の古代を照らして見た。時々面白い發見などもした。發見する毎に、これを郷里の新聞に發表した。それを見て、伊波君は氣が狂つたのではないかと、怪しんだ人々もあつたといふことである。

明治四十三年に、いよ／＼縣立沖繩圖書館が設立されて、私はその館長を囑託され、一兩年前、漸くその館長を拜命したが、この十五年の間に、私は特に琉球研究資料五千冊を蒐集して、琉球研究の基礎を築いた。が、開館當時のことを考へて見ると、ただ丸岡知事時代に編纂された琉球史料六十餘冊があるのみであつた。尙おまけに、田島氏が見出されたといふあの記念の『おもろさうし』二十二冊が紛失して見えなかつたので、いつもそれが氣になつて仕様がなかつた。そこで氏から譲り受けた本を書き寫してその缺を補ひ、念の爲に副本までつくつて置い

た。近頃郷土研究熱が高まつてから、圖書館所藏の『おもろさうし』を寫し取つた人が一二名ある。兎に角、『おもろさうし』は世界中に十二三部しか無かつたが、こないだの震災の時に、帝大の國語研究室にあつた『おもろさうし』外二三部が焼失したのであるから、今のところ八九部位しか無いと思つたら、間違がない。

二三年この方、南島研究が漸く盛んになつて、琉球に關する書籍が續々刊行されるやうになつたのは、本邦學界のために、誠に喜ぶべき現象である。この機運に乗じて、柳田國男氏等の盡力の結果、帝國學士院補助の下に、琉球の聖典ともいふべき『おもろさうし』が刊行されることとなり、私はその校訂の任に當ることが出來たのは、身に餘る光榮といはなければならぬ。私は田島氏より譲り受けた『おもろさうし』を臺本とし、尙侯爵家の原本と仲吉朝助氏所有の『おもろさうし』とによつて校訂した。ついでにいふが、尙侯爵家所藏の原本の第二卷・第九卷・第十五卷・第十九卷の四冊が、久しい以前に失はれて、新しく補充されたのは、かへす／＼も惜むべきことである。

『おもろさうし』の校訂に當つて、尙侯爵家が特に其の書庫を開放されて、オモロのテキストを閱讀するの自由を與へられ、その上テキスト中の數枚を撮影するを許されたのは、私の感謝して措かざるどころである。

それから、この校訂のついでに、私がオモロの代表的のもの九十八首を選び出して、解釋を試み、これを『おもろさうし選釋』と名づけて、世に公にすることを、こゝに附記させて貰ひたい。これは全くオモロ校訂の副産物といつていい。この小冊子が萬一校訂『おもろさうし』を研究する人の手引にでもなつたら、望外の幸である。

『校訂おもろさうし』を刊行するに當り、『おもろさうし』の歴史を略述して、序に代へる。

大正十三年七月二十五日、沖縄圖書館の郷土史料室にて、

伊波 普 猷 識

例 言

一 『おもろさうし』は、歌數總べて千五百五十一首、中に重複したのもあるが、それでも千百五十首を下らない。西曆十二世紀の中葉から同十七世紀の中葉まで、殆ど五百年間のオモロを收めたもので、琉球の萬葉集ともいふべきものである。けれどもこれは單に形式の方面から見つたもので、その内容を能く調べて見ると、むしろ古事記・萬葉・祝詞の三者に該當するもので、琉球の聖典ともいふ可きものである。オモロは普通神歌と記し、又神唄とも書く。その語原は詳にすることが出来ないけれども、唯、ウタといふ意味のあることは、斷言するを憚らない。兎に角祭政一致時代の産物であつて、その大部分が神事に關するもので、神事若しくは神と稱せられる彼等祝女その他の神職の間のみ用ひられたことからいふと、語原はともあれ、今は神歌と稱へても差支ないのである。慶長十四年の島津氏の琉球入後、社會の變遷につれて、オモロがだん／＼衰へるやうになり、近代の祭司詩人（おもしろのはら）が、神主が祝詞（のりごと）を綴るやうに、古い銘にはめて之を作るやうになつたのは、かへす／＼も口惜いことである。オモロの中には、琉球の開闢を歌つたものを初として、神や王や英雄を謳つたもの、戰爭をう

たつたもの、航海や貿易をうたつたもの、天體の美を謳つたもの、風景を詠じたもの、などがある。そしてきはめて稀に戀を歌つたものもある。世にオモロを措いて、古琉球の思想及び言語を研究すべき資料はない。オモロには何等技巧の見るべきものがなく、之を修辭の側から見て、別に取り立てゝいふべき程のものもないが、西詩などのやうに韻を踏んだところなどは、萬葉と全く赴きを異にする點である。其他頭韻アリタレシヨク法に相當する繰返しなどが、かなり用ひられてゐるのも注意すべきである。それから對句は日本歌謠の最も主要な裝飾であるが、古琉球人も亦この對句を喜んだのである。加之、琉球では古來歌はよむ歌と、たふ歌とに分離しない状態にあつて、どの歌も樂器に合はせて謠へるやうになつてゐるから、オモロはもとより、その他の歌謠にも、旋律的なのが多い。特にオモロの旋律は、オモロの意味を全く解せない人にも感ぜられるやうになつてゐる。

一 オモロの記載方は、出來得るだけ、原本に従つたが、中には多少訂正したところもある。これには、萬葉などのやうに、ぶつ續けに書き下さないで、西詩のやうに、一句々々書き並べたところに特徴がある。行の初めに一或は又の字があるのは、ライン又はスタンザの初めを示す記號に過ぎない。そしてこの又は、一を繰返すの義である。この記號には三通りの使ひわけがあるやうに思はれる。第一、十四の卷の五章のやうに、これが各ラインの初めに附

けられるもの、第二、三の卷の一章のやうに、これが各スタンザの初めに附けられるもの。第三、五の卷の三章のやうに、又が第二若くは第三のスタンザの第一行に附けられて、第二行以下が略された等である。けれどもこれらは兎に角大體の標準であつて、その外にこれらの三形式の混合したものゝあることを知らなければならぬ。

一 オモロの句讀は單なる句讀ではなく、それを謠ふ時に必要なふしでは無かつたかど疑はれる節がある。それは「とよむ、よんた、むざ」(名高き讀谷山)、「まだ、まもりぐすく」(眞玉森城)、「きやか、まくら」(京鎌倉)、「てる、まはま」(照屋濱)、「ふな、こゑらで」(船子を選びて)、「ぐし、かむの、もりに」(具志川の森に)、「やちよ、こた」(田舎の吏員の妻等)、「あらぎや、め」(有るまで)、「きもか、よひかよて」(心の通ひに通ひて)、「あがひやしう、たば」(我が拍子をうたば)、「おぼつ、世はみ、おやせ」(天つ國の如き國を奉れ)などの例を見てもわかる。

一 原本には無いが、研究者の便利の爲に、卷毎に何々がふしといふオモロの表題の上に番號を附けて置いた。時偶整頭に、十七の二とか、二十二の二八とかいふやうに、數字のつけてあるのは、十七の卷の二章とか、二十二の卷の二十八章とかに、同一のオモロの出でゐることを示したもので、語句の比較研究をする人に、多少の便利を與へるであらう。

一 序のところでも述べた通り、尙侯爵家所藏の原本には無いが、安仁屋家所藏の原本には言葉間書といふものがある。言葉間書はその文字の示す通り、言葉の間の書き入りで、註といふことである。原本には語の右側に朱書してあるが、この校訂本では、印刷の便宜上、其處には一二等の見出しをつけて、註は整頭に出すことにした。

一 句讀の右側又はその他の所に、アと記したのは、舊おもろ主取安仁屋の略符で、注の上にモを冠したのは、原本にもとからあつたことを示す略符である。

一 終りに、『おもろさうし』の原本で、よく混同せる假字に就いて注意しておかう。るごり(か)、りごり(か)、りごも、らごし、らごふ(た)、まごせ、はよく混同する。それから一つの假字を繰返す時の、は、筆勢上、く又はくに見えることがある。くごくごも見わけのつかないことが能くある。これだけのことを念頭に置いて、『おもろさうし』に對したら、オモロを解釋するときに、多少の便宜を得るであらう。

校訂

おもろさうし

おもろ御さうし目録

第一

きこゑ大きみかおもろ
首里王府の御さうし
嘉靖十年

第二

中城越來おもろ
首里王府の御さうし
萬曆四十壹年五月二十八日

第三

きこゑ大君がなしおもろ御さうし
天啓三年癸亥三月七日

第四

あおりやゑ、さまかさの、おもろ御双紙
天啓三年癸亥三月七日

第五

首里天きやまへ、あんしおそいがふし
首里おもろ御さうし
天啓三年癸亥三月七日

第六

まより大君、せんきみ、君かなし、
もゝこふみあかり、きみの、つんしの、おもろ御双紙
天啓三年癸亥三月七日

目録

第七 首里天きやまへ、あんしおそい、かなし、
とひの、おもしろ御さうし
天啓三年癸亥三月七日

第八 首里天きやまへ、あんしおそい、かなし
おもしろねやかり、あかいんこが、おもしろ御双紙
天啓三年癸亥三月七日

第九 首里天きやまへ、あんしおそい、かなし
いろ／＼の、こねり、おもしろ御双紙
天啓三年癸亥三月七日

第十 ありき、ゑごの、おもしろ御さうし
天啓三年癸亥三月七日

第十一 首里ゑご、おもしろ御さうし

第十二 いろ／＼の、あまび、おもしろ御さうし
天啓三年癸亥三月七日

第十三 船ゑごの、おもしろ御さうし
天啓三年癸亥三月七日

第十四 いろ／＼の、ゑさ、おもしろ御さうし

第十五 首里天きやまへ、あんしおそいかなし
うらおそい、きたゝん、よんたむさ、おもしろさうし
天啓三年癸亥三月七日

第十六 首里天きやまへあんしおそいかなし
勝連具志川おもしろ御さうし
天啓三年癸亥三月七日

第十七 恩納より上のおもしろ御さうし

第十八 首里天きやまへあんしおそいかなし
まま中おもしろ御さうし
天啓三年癸亥三月七日

第十九 ちゑねん、さしき、まなくすく、
おもしろ御さうし
天啓三年癸亥三月七日

第二十 くめまおもしろ御さうし
天啓三年癸亥三月七日

目録

第廿一 くめの二まぎりおもしろ御双紙
天啓三年癸亥三月七日

第廿二 みおやたいりおもしろ御双紙

共貳拾貳冊

きこゑ大きみりたもろ

首里王府の御さうし

嘉靖十年

第一



(一) あおりやへがふし

一きこゑ大きみ ぎや、

おれて、あすび、よわれば
てにが、また、

たいらげて、ちよわれ

又とよむせだかこが

又煮よりもりぐすく

又まだまもりぐすく

(二) あおりやへがふし

一きこゑ大きみぎや、

おれて、あすびよわれは、
かみてだの、まぶり、よわる、
あんじおそい

校訂おもしろさうし

又とよむせだかこが

又首里もりぐすく

又まだまもりぐすく

(三) あおりやへがふじ

一きこゑ大ぎみぎや、

世そう、せぢ、みおやせは、

千萬、世、そわて、ちよわれ

又とよむせだかこが

又きこゑあんじおそい

又とよむあんじおそい

又首里もりぐすく

又まだまもりぐすく

又大さみす、まぶらめ

(四) あおりやへがふじ

一きこゑ大ぎみ ぎや、

てにの、いのり、まよわれば、

てるかはも、ほこて、

おぎやかもいに、

かざりうちちへ、みおやせ

又とよむせだかこが

(五) あおりやへがふじ

一きこゑ大ぎみぎや、

あけの、よろい、めしよわちへ、

かたな、うちい、

ちやくくに、とよみよわれ

又とよむせだかこが

校訂おもしろさうし

又月去ろは、さだけて
又物去りは、さだけて

(六) あおりやへがふし

一きこる大きみぎや、
かぐらゑが、ごりわちへ、
あんどおそいす
ともゝすへ、ちよわれ
又こよむせだかこが
又てるかはと、よきやて
又てるしのと、よきやて
又首里もりぐすく
おれて、おれふさよわ
又まだまもりぐすく
又ききやの、うきしま

ききやの、やけしま

又首里もりぐすく、

世がけにせ、あんどおそい

又まだまもりぐすく、

おそいにせ、あんどおそい

又きこるあんどおそいや、

かぐらぎやめ、こよで

又こよむあんどおそいや、

おぼつぎやめ、こよで

(七) あおりやへがふし

一きこる大きみぎや、
とたけ、まさり、よわちへ、
みれども、あかぬ、
首里おや國

校訂おもしろさうし

又 ごとよむせだかこが

又 首里もりぐすく

又 まだまもりぐすく

(八) あおりやへがふし

一 きこゑ 大ぎみぎや、

けよの、せぢ、やりよわば、

えま、まるく、

みこゑしやり、おそわ

又 ごとよむせだかこが

又 首里もりぐすく

又 またまもりぐすく

(九) あおりやへがふし

一 きこゑ 大ぎみぎや

おれて、おれ、ふさよわちへ、

ようそろいて、

おぎやかもいに、みおやせ

又 ごとよむせだかこが

又 首里もりぐすく

又 またまもりぐすく

(一〇) きこゑたうやまがふし

一 きこゑ 大ぎみぎや

いくさ、せぢ、みおやせ

又 ごとよむせだかこが

又 きこゑ あんじおそいや

又 ごとよむ あんじおそいや

(一一) あおりやへがふし

一きこゑ 大ぎみぎや、

ごもゝさに、しちへ、ちよわれ

又ごよむせだかこが

又首里もりぐすく

又まだまもりぐすく

(一三) 大ぎみがいくさせちみおやせがふし

一きこゑ、たうやまに、

大ぎみぎや、けやりよわ、

又ごよむたうやまに、

又せるましの、くひしに

又えまじりの、いくさに

(一四) あおりやへがふし

一きこゑ 大ぎみぎや

かいなでわる、たゝみきよ、
かほうよる、

みやかの、もり、ちよわれ

又ごよむせだかこが

又首里もりちよわる

又まだまもりちよわる

(一五) あおりやへがふし

一きこゑ 大ぎみぎや、

いのり、たてまつれば、

まん、まん、あすら、まん、ちよわれ

又ごよむせだかこが

又首里もりぐすく

又ま玉もりぐすく

(一五) あおりやへがふし

一きこゑ大ぎみぎや

せぢ、だか、うちやがて、ちよわれ

又ごよむせだかこが

(一六) あおりやへがふし

一きこゑ大ぎみぎや

首里もり、おれわちへ、

おぎやかもいや、

きみえよ、まぶりよわめ

又ごよむせだかこが

まだまもりおれわちへ

又さしふ、てるくもに、

おれ、なおちへ、からは

一きこゑ大ぎみぎや

せぢごよみ、せ、いくさ、

しま、うちの、ごよみ

又ごよむせだかこが

せぢごよみ、せいくさ

又きこゑあんじおそいぎや

せぢごよみ、いくさ

又ごよむあんじおそいぎや

(一七) あおりやへももりやあんじがふし

又さしふ、てるきえやけ、

おれ、ふさて、からは

又てるかはご、ごこゑ、やり、かわちへ

又てるしのご、ゑりぢよ、やりかわちへ

又てるかはも、ほこて

(二) 勢軍

せぢとよみいくさ
 又 忍そこ、かよわ、ぎやめ、
 せぢ、やり、やりおそう
 又 みおうね、かよわ、ぎやめ、
 せぢ、やり、やりおそは
 又 せ、いくさ、おしたてば、
 けおやり、やりまぶら
 又 せ、ひやく、おしたてば、
 けおやり、やり、まぶら
 又 だしきや、うちぐき
 ちや、はれ、まわらし

(一八) あおりやへがふし

一きこゑ大ぎみぎや
 首里もり、おれわちへ、

三の四九

三の五〇

ひやくさ、ぎやめ、
 おぎやかもいしよ、ちよわれ
 又 せよむせだかこが
 ま玉もり、おれわちへ
 又 きこゑあんどおそいや
 又 せよむあんどおそいや

(一九) あおりやへがふし

一きこゑ大ぎみぎや、
 けよふらす、あめや、
 きやの、うちみやに、
 こがね、ふりみちへて
 又 せよむせだかこが
 又 けおのよかるひに
 又 けおのきやかるひに

三の五一

(一)種等こ

三の五二

(二)舟こ

校訂おもしろさうし

(二一〇) あおりやへがふし

一きこゑ大ぎみぎや

まけうち、あや、あすばちへ、

ちよらの、はなの、

うらくと

とよで、みもん

又とよむせだかこが

(二一一) あおりやへがふし

一きこへ大ぎみぎや

ま(二)まうちこみ、おしうけて、

かぐらので、よりとみる、かに、ある

又とよむせだかこが

又けおのよかるひに

又けおのきやがるひに

(二一二) きこへ大ぎみみてづからいのがふし

一きこゑ大ぎみぎや

みかなしけ、あんどおそい、

うらくと

ゑん(三)ざしき、ちよわれ

又とよむせだかこが

(二一三) よろきげらへがふし

一大ぎみぎや、

いろのべに、なしよわちへ、

きみしなで、な(三)よらに

又せだかこが、

またまへに、なしよわちへ、

三の五三
七の二四

(一)ア、あん
ざしき

三の一九
(二)ア、より
きげらへが
ふし

(二)これりこ

校訂おもしろさうし

又けおのよかるひに

又けおのきやがるひに

(二四) あおりやへがふし

一きこゑ大ぎみぎや、

おれて、おれ、なふしよわ

あんじおそいに、

世がほう、みおやせ

又とよむせだかこか

(二五) あおりやへがふし

一きこゑ大ぎみぎや、

はちめ、いくさ、

たちよわちへ、

あおて、いきやり、

かたき、ひちめ、わちへ

又とよむせだかこか

(二六) あおりやへがふし

一きこゑ大ぎみぎや、

世がけ、せち、おろちへ、

あんじおそいしよ、

をゑ、まさて、ちよわれ

又とよむせだかこか

又首里もりぐすく

又まだまもりぐすく

(二七) あおりやへがふし

一きこゑ大ぎみぎや

あまゑわちへ、からは、

校訂おもしろさうし

(一)モ、父親

(二)モ、嶋世
の有迄とこ

(二) なさいきよもいに、
(三) 亥まが、いのち、みおやせ
又とよむせだかこが
又亥よりもりぐすく
又ま玉もりぐすく

三の五八

(二八) あおりやへがふし

一きこゑ大きみぎや、
世がほう、もりに、
亥まゆ、そろへ、わちへ
又とよむせだかこが
又さしきかなもりに世がほう
又きこゑ、あが、なさいきよに

三の六〇
二二の二四

(二九) 大ざこの、げすの、おもい、あんじぎやふし

一よなはばま、きこゑ大きみ、
(二) やちよ、かけて、とよまさ
又あきりぐち、とよむ大きみ、やちよ
又ばてん、ばま、きこゑ、てるきみ、やちよ
又あからかさ、もゝと、ふみあがり、やちよ

三の五九

(三〇) あおりやへがふし

一きこゑ大きみぎや、
あめもらん、もりに、
いのち、あかり亥よ、
世は、ちよわれ
又とよむせだかこが
又さしきかなもりや

一〇の八
一三の一三二

(三一) きこゑ大きみぎやさはだけおれわちへがふし

一きこゑ大ぎみぎや

てるかはは、のだて、

あんじおそいしよ、

てにぎや下、おそちへ

又とよむせだかこが

てるしのは、のだて、

又いせゑけり、あんじおそい、

あゆが、うちは、なげくな

いせゑけり、たゞみきよ、

おぎも、うちは、なげくな

又せいくさ、おしたては、

大ぎみしよ、世ゑらめ

又せひやく、おしたてば、

せだかこす、世ゑらめ

又國もちの、はらはら、

(一) 勝りこ

(二) 肝心

(三) 按司のかへし名こ

(四) モ、いくさ

(五) ア、ひろく

おぼつなよ、世そろへて

又うらよせの、もどろ、

かぐらなよ、世そゑ

又國かねの、はうら、

ゑまは、たいらあげて

又うらひぢめ、もどろ、

くにひろく、そゑて

又あかぐちやが、よいつき、

せいくさ、て、はねて

(三三) 天より下の王にせがふし

一きこゑ、きみおそい、

おれて、あすび、よわれば、

てにより、ゑたの、

せぢ、がほう、みおやせ

一一〇の一九一
一三〇の一九一
（一）ア、あお
しややくしふり
あちのふり

（二）モ、男

校訂おもしろさうし

又せたかきみ、おそいきや
又まよりもりぐすく
又まだまよりぐすく

（三三）あおりやくも、やあちのふり

一きこゑ大ぎみぎや、
ちやくにや、世、そゑる、
あんじおそいしよ、こよめ
又こよむせだかこが
又いせゑけり、あんじおそい
又いせゑけり、たゞみきや
又せいぐさ、せぢ、まされ
又せひやく、せぢ、まされ
又まよりもり、ころく
又みまかす、ころく

（三）モ、實
（四）ア、實
（五）モ、ふれ
（六）モ、舟
（七）モ、肝

又あよ、ちよく、げに、あれ
又きも、ちよく、だに、あれ
又けやる、せいやりとみ
又けやるてよりとみ
やへま、ま、いつこ、
あよ、まよいしめや
又はたら、ままくはら、
きも、まよいごらちへ
又首里もり、あせは、
つちぎりに、きらせ
又ま玉もりちかわは、
みちやぎりに、きらせ
又うらのかず、かみおそい、
あいてなて、まぶら

(三四) きこへきみおそいがふし

一 きこゑ大君ぎや、

さやはだけ、おれわちへ

うらくと、

御さうせ、やに、ちよわれ

又 ごとよむせたかこが

よりみちへに、おれわちへ

又 いしゑけり、あんどおそい

かいなで、す、よりおれて

又 いしゑけり、たゞみきや、

み、まぶてす、よりおれて

又 おぎも、うちに、御さうせ、

あけどまに、たごゑちへ

又 あよが、うちに、御さうせは、

あけだちに、たごゑて

又 せいくさ、ゑが、ごりよれちへ、

ままうち、せぢ、もちよろ

又 せひやく、ゑが、ごりよわちへ

くにうちせぢ、もちよろ

又 いべの、いのり、まよわちへ

うらくは、よせて

又 つかさ、いのり、まよわちへ、

なでるわは、よせて

又 ぎらのかず、ゑかのかず、いので、

うらくと

(三五) おらそいおもろのふし

一 きこゑ大ぎみぎや、

おしやたる、せいくさ、

校訂おもしろさうし

あんじおそいしよ、世、そゑれ

又ごよむせだかこが

おしやたる、せいくさ

又(二)あはれ、かなし、きみはゑ、

ま、うちしちへす、もどり、よれ

又あはれ、かなし、きみはゑ、

くに、うちしちへす、もどりよれ

又(三)もりやへアタシこた、ちやくに、しちへ、

ま、うちしちへす、もどりよれ

又(四)大(三)あゐた、ちやくに、しちへ、

くにうち、ま、ちへす、もどりよわれ

又(五)そこかず、ころたよ、

ま、うちしちへす、もどりよわれ

又(六)み(五)お(四)う(三)ね(二)かず、ころたよ、

あおてす、もどりよれ

又おぼつぎやめ、ごよ

あおてす、もどりよれ

(三六) あがおなりがみのふし

一 あんじおそいや、

金うちに、ちよわれ

世の、さうせ、まよわれ

大ぎみす、けいやりよわれ

又 あんじおそいや、

けおの、うちに、ちよわちへ、

世の、さうせ、まよわれ、

せたかこす、けいやり、よわめ

又 あんじおそいや、

おぎも、うちは、なげくな、

大きみす、けいやりよわれ

(一)モ、餘り能

(二)モ、男人

(三)モ、大男

(四)モ、男

(五)モ、舟

又たゞみきよは、

あよが、うちは、なげくな

又首里もり、大ころが、

まま、ひろく、そへて、

あんじおそいに、

世そへて、みおやせ

又みまかす、ころく、

國ひろく、そへて

又きみはるが、

みやこ、まま、はちへおわれ、

しまひろく、そへて

又けおのまよが

やへまま、はちへ、おわちへ、

くにひろく、そへて

又やへま、しま、いづこ、

(一)モ、男

あせら、ためやはは、

大ぎみす、世まらめ

又はたら、しま、くはら、

ちかわ、ためやはは、

せだかこす、世まらめ

又あせら、ためやはは、

おきなます、すもらん、

大ぎみす、世しらめ

(三七) かくらごよでがふし

一きこゑ、大君ぎや、

とよむ、せたかこが、

とよまちへ、みおやせ

又なさいきよもい、あんじおそい、

あがかいなで、あんじおそい

(一)モ、行合

(二)モ、能き
(三)モ、大男
(四)モ、男
(五)ふ、てこ

又けおの、うちの、もちよる、
もちろ、うちの、もちよる

又國、きよらは、あおらちへ

あけめつら、あおらちへ

又なりごよみ、うちあけて、

なりきよらは、うちあけて、

又大ぎみは、いきよて、

きみくは、いきよて

又けおのより、おれわちへ、

もちろ、かちへ、あすべは

又げらへ、大ごらた、

さに、まらん、ころく

又あよ、そろて、そこて

きも、そろて、そこて

又いつこ、このみ、しま、

くはら、このみ、くに

又あが、なやり、おれわちへ

やし、なやり、おれわちへ

(三八) かぐらごよでがふし

一きこゑ大ぎみぎや

ごよむせたかこが、

みしま、いのられ

又首里もり、ちよわる、

ま玉もり、ちよわれ

又なさいきよもい、あんじおそい、

あが、かいなであんじおそい

又大ぎみよ、いきよて、

せだかこよ、てづて

又ゑそこ、なよ、こゆわちへ

三の八

(一)モ、舟
(二)船

校訂おもしろさうし

みおうね、なよ、こよわちへ

又あまの、^(三)そこらしや、

あまの、まうれしや

又^(四)よひき、ごみ、おしうけて

せちあら、ごみ、くりうけて

又世づき、ごみ、おしうけて

くもこ、ごみ、くりうけて

又^(五)まやい、ごみ、おしうけて

おしあけ、ごみ、くりうけて

又たけ、たけよ、いので

もり、もりよ、いので

又あおりや、とりよわれ

ておりや、とりよわれ

又^(六)ゑそこかず、つけわちへ

みおうねかず、つけわちへ

(三)モ、嬉し

(四)モ、舟

(五)モ、舟

(六)モ、舟

(七)モ、波

(八)モ、波

又^(七)そさん、なご、やけて

又^(八)おなみやよ、とッやちへ

又おしうけかず、み、まぶら

くりうけかず、み、まぶら

又きみくしよ、世まらめ、

ぬしくしよ、世しらめ、

(三九) かぐらごよでがふし

一きこゑ大ぎみぎや、

とよむせたかこが、

いつこ、しま、とよで

又おぼつ、世の、まだかさ

かぐら、世の、まだかさ

又^(九)おぼつ、よためかちゑ

てに、ち、よためかちへ

(一)モ、天地
とよまぢ

(二)同上

(三)輝くこ

又よなはばま、よりおれて
 よきのはま、よりおれて
 又けおの、うちの、のろく
 もちろ、うちの、のろく
 又みよたちやは、ぬきあげて
 よおたちやは、おしあけて
 又いきやる、なまたにやか、
 いきやる、あよなかか
 又きみよ。かゞ、あらしへ
 めしよ。かゞ、あらしへ
 又きも、たちよれども
 あよは、たちよれども
 又首里もり、ちよわる
 ま玉もり、ちよわれ
 又なさいきよもい、あぢおそい

(四)ふこてこ

あが、かいなで、あんどおそい
 又あけの、つよ、おさちへ、
 又もの、つよ、おさちへ
 又いつこ、まま、そろゑて、
 このみ、しま、そろゑて
 又きみ、たうり、まよわちへ、
 ぬしかまゑ、ごり、よわちへ
 又いつこ、いのち、つきよわちへ、
 くはら、いのち、つきよわちへ
 又ほおてく、まられ、
 又おてく、まられ、
 又てるかはが、おざし、
 てるしのが、おざし

二二の二七

(四〇) せちやりくやまごしまひちめがふじ

(一)モ、空々
(二)モ、空々

校訂おもしろさうし

一 (一)ふるや、とよむ、大ぬし、
かなや、とよむ、わかぬし
ふるや、せぢ、みおやせ
又だしま、おそう、あぢおそい
だきより、おそう、あぢおそい
又よりみちへは、やぬて、
せぢよせは、やぬて
又大ぎみは、いきよて、
せたかこは、てづて、
けおの、うちの、もちよろ、
もちろ、うちの、もちよろ
又ほこる、てゝ、げに、あり
そこる、てゝ、だに、あり
又あかぐちやが、はねて、
せるまゝが、はねて

(三)モ、天迄
(四)モ、同上

又 (三)ふるや、きやめ、どうちへ
かなや、ぎやめ、どうちへ
又あまふこの、うらやて、
けさふこの、きこゑて
又ふるやゑが、とりよわちへ、
かなやゑが、とりよわちへ
又ゑよりもり、うちあよで、
またまもりうち、あよで
又かねの、みうち、まみやに、
くもこ、みうち、まみやに
又あやこ、ばま、やひちへ、
ゑつこばま、やひちへ
又さん。こおり、させわちへ
さん。みあしやげさせわちへ
又あよが、うちの、うまれて

をぎも、うちの、すぐれて
 又ゑぞふや、ませ、あぢおそい
 てたが、すゑ、あぢおそい
 又ふるやせぢ、あらぎやめ、
 かなや、せぢ、あらぎやめ
 又ゑよりもり、ふさい
 まだまもり、ふさい
 又大ぬしす、まぶれ
 わかぬしす、まぶれ

(四一) あおりやへがふし

一あがる、おりかさが、
 大きみに、まられて、
 いけな、ゑらで、おろちゑ、
 あんじおそい、ともゝすへちよわれ

(一)モ、勝ル
世界へ

(二)皆々へ

又きこゑ大きみぎや
 ぶれまに、
 おぎも、せぢ、やりよわちへ
 又どよむせだかこが
 おぎも、うちにふ
 まなよわ、あぢおそいま、
 又あがる、おりかさが、
 もりやへきみ、おもいぐわ
 もち「な」ちやる、いけくしや
 又ゆきあかりが、おもいぐわ、
 あがるおりかさが、
 又もち、なちやる、いけくしや
 又きみくが、おもいぐわ、
 もち、なちやる、いけくしや
 又ひよう、おきて、

校訂おもしろさうし

まなしけ、たゝみきよに、

えられ、あぢおそい

又げらへ、よらなさよ、

首里もりおれぼしや

又げらへ、ゆらふさよ、

ぶれえまに、こよで

中城越來のねもろ

首里王府の御さうし

萬曆四十一年五月廿八日

第二

(一)モ、門

(一) おもろくさりおろちへがふし

一きこゑ、中ぐまぐ、

あがるいに、むかて、

(二) いちやちや、たてなおちへ、

だくに、おそう中ぐすく

又ごよむ中ぐまぐ

てだが、あなにむかて

(三) いちや「ちや」たてなおちへがふし

一きこゑ中ぐすく

おもろ、くさり、おろちへ、

おろちへ、なおしよわちへ

又ごよむ中ぐまぐ

(三) おもしろくさりおろちへがふし

一きこゑなかぐまぐ
ゆかる、まいくが、
のろくふ、つめて、
なあがりよわちへ
又こよむ中ぐまぐ

(四) おもしろくさりおろちへがふし

一きこゑ中ぐまぐ
けさや、つのひらせ、
いみやえ、せめてうたん、
なかぐすく
又こよむ中ぐまぐ

(五) おもしろくさりがふし

一きこゑ中ぐまぐ
つきのかせ、なつやふ
あまゑて、かゝ、ちよわれ
又こよむ中ぐまぐ

(六) おもしろくさりがふし

一きこゑ中ぐまぐ
かみの、もちやらの、
おもて、さうせて、こうは、
いしご、かねご、
あわちへは、もごせ
又こよむ中ぐまぐ

(七) あおりやへがふし

一 きこゑながぐまぐ
たまの、みつ、まわり、
まわちへ、もちへ、
あちおそいふ、みおやせ
又 ごとよむ中ぐまぐ

(八) おもろくさがふし

一 きこゑながぐまぐ
いちみ、さうせ、いちやちへ、
かみまもの、げまの、
みちへど、うらやみよる
又 ごとよむながぐまぐ

(一) 泉清水

(九) あおりやへがふし

一 はしかりが、おもろ、
たま、よ、そろいわちへ、
もちつき、あすば「か」せ、きよらや
又 はしかりがせるむ

(一〇) あおりやへがふし

一 きこゑながぐまぐ
たまの、きみ、てづて、
よきや、のろま、
おもろ、ねや、
とりよわれ
又 ごとよむ中ぐまぐ

(一一) あおりやへがふし

一 中ぐをく、あつる、
うらとよむ、つゞみ、
うちちへ、なりあがらせ
又とよむくふあつる

(一二) あおりやへがふし

一 中ぐをく、ねくに
ねくふ、あつる、はやぶさ、
とく、大みやかけて、
ひきよせれ
又とよむくへの、ね、
くふの、ねに、あつる、はやぶさ

(一三) くまなかのまよりもりぐすくがふし

一 きこゑ中ぐをく
とよむながぐをく
あち、かまが、てもち、
中ぐをくよせれ
又きこゑ、いろめきや
とよむ、いろめきや、
又おれつむが、たてば、
わかなつが、たてば

(一四) まよりま人がふし

一 よきや、のろの、
けはや、のろの、
まわちへ、もちちやる

校訂おもしろさうし

又なだか、つるぎ

おしあけ、つるぎ

又中ぐすく、こしあてもりに

(一五) たいらこしらへがふし

一あまみや、よきや、のろの、

ゑ、け、やれ、ゑ、け、

又えねりや、よきや、のろの

又御まへ、か、おらに

又おそば、か、おらに

(一六) きこへあけしのがふし

一やぎの、かなもりに、

まへへの、ひやしうたば、

きみも、なよら

(二)モ、これ

又ひがの、かなもりよ

(一七) きこへあけしのがふし

一やぎの、かなもりよ、

あけがなし、てづて、

世、まさる、みやかり、

ほありよわちへ

又ひがのかなもりよ

(一八) きこへあけしのがふし

一やぎの、かなもりよ、

みもの、みやふ、おろちへ、

かみしもの、みものをる、きよらや

又ひがの、なかもりよ

(一) 具足はら
卷之事

(一九) きた、んよのぬしのふじ

一 やぎから、のぼる、^(二) 煮たゝりや、
よろい、たるが、きちへ、よせる、
あぢおそい、てだま、
めしよわちへ、よせれ
又 ひがから、のぼる

(二〇) 中よしのごよみうらがふじ

一 中ぐまぐ、よしのうら、
よしのうらの、めづらしや、
けよから、^(三) 煮ばく、みらに
又 やぎのうらの、よしの、うらの

(二一) うらおそいおもしろのふじ

一 あらかきの、ねたか、もりぐすく、
てだが、ふさよわる、ぐまぐ
又 てよつぎの、ねたか、もり

(二二) うらおそいおもしろのふじ

一 あらかきの、くよのねよ
けよ、^(四) 煮よる、つかい、
もゝこの、つかい
又 天つぎの、煮まのねよ

(二三) くよ中の煮よりもりぐすくがふじ

一 いちよのし、ぎや、おもしろ、
^(五) いちらこが、せるむ、
のちも、みやも、ちよわれ
又 けおのゆかるひよ

(一) モ、人名
(二) ン、人名
(三) モ、人名
(四) ン、人名
(五) ン、人名

けおのきやかるひよ

(二四) くよ中の老よりもりぐすくがふし

(一)ア、うら
おそいおも
ろがふし

一あだよやの、わかまつ、

あはれ、わかまつ、

よださちへ、うらおそう、わかまつ

又きもあぐみのわかまつ

(二)くじ(故事)むかしあかのこと申名人或時安谷屋邊に罷過候折童子ひとり笹の荷
をかたげ参候を其笹ひとつやられ(呉れずや)と申されと則童子荷を卸鎌にて笹の皮
をさり四ツまわり捲ルされば名をばいかにとあればまつと答ルその時給り申おも
ろし

(二五) うらおそいおもしろのふし

一あだよやも、まらたる、

きも、あぐみ、まらたる、

この、いくさ、せちやて、もどせ

又およのきも、まらたる、

よらせ、きみ、まらたる

又よなはしぎや、

へごもいが、かたな、うち

(二六) うらおそいおもしろのふし

一きこゑ、およの、きみ、

あだよやの、もりよ、

かみ下の、ごそば、

そろいわちへ

又どよむ、およの、きみ

きも、あぐみの、もりよ

(二七) 御ざけやはらがふし

一あだよやの、きも、あぐみの、もりよ、

世がほう、よせわる、たゝみ
又ぐまくと、たゝみと、まなて
又たゝみと、まなでまごまなて

(二八) うらおそいふし

一あだよやは、ねしやり、
およの、きみ、てづて、
世がけ、せぢ、まわちへ、
もちちへ、みおやせ
又アになしき(み)もあぐア、アみ、ねしやり、
よらせきみ、てづて

(二九) あかいんこがふねたてはがふし

一あだよやの、いちみ、さうせ、
もゝちやらの、うらやも、さうせ

(一) 清水

一きもあぐみの、いちみ、さうす

てんかぜ 二七

(三〇) うらおそいおもろのふし

一ごゑく、もりぐまぐ、
いきよいつな、やちよこ、
もゝうら、そわる、ひやし、
うちちへ、みおやせ
又あかる、もりぐまぐ
又やりかさの、おやのろ

(三一) うらおそいおもろのふし

一ごゑくあやみやに、
もちなちやる、いけくしや、

くもこ、またまマ、なわマ

又のちやる、ことく

又ごゑく、くせよやよ

(三二) ねいしまいしのふじ

一ごゑく、もりぐまク

おみや、つちみちやる

又あかるもりぐまク

(三三) うらおそいおもろのふじ

一ごゑく、こてる、わよ、

ゑのち、ともおそいや、

あまみきよが、たくだる、ぐすく

又みもの、こてるわよ

(三四) うらおそいおもろのふじ

一ごゑく、あやみやよ、

こがね、げは、うへて、

こがね、げが下、

きみのあぢの、

まの、ぐり、よわる きよらや

又ごゑく、アミシくせみやに

(三五) うらおそいおもろのふじ

一ごゑく、こてるわにマ

ゑのちども、おそいや、

ゑのち、かみどのよ、つかい

又やりかさの、おやのろ

(三六) うらおそいおもろのふじ

一 ござるく、こてる、^{アなし}わよ、

あやつちへよ、せゝとやせ

やりかさの、おやのろ

(三七) 中ぐまくおもろのふじ

一 ござるく、世のぬしの、

^(三)またちよもい、なしよわちへ、

これど、かほうてだ、

ござるく、あらぎやめ、ちよわれ

又あかる世のぬしの

(三八) うらおそいおもろのふじ

一 ござるく、世のぬしの、

わしの、みね、ちよわちへ、

いみやからどござるくは、

いみきや、まさる

又あかる、世のぬしの、

こちや、ひら、ちよわちへ

(三九) うらおそへふじ

一 ござるく、世のぬしの、

わしの、みね、ちよわちへ、

ひがの、うみ、みよれを、

しらなみや、

かなごり おそうやよ

又あかる世のぬしの

(四〇) うらおそへふじ

(一)モ、思子

一 ござるく世のぬしの
わかつかさ、てるひおのかなか、
つくせ、ごよりよる
又あかる世のぬしの

(四一) うらおそいふじ

一 ござるく、世のぬしの
つゝみの、あぢなりがなし
ふうくよ、うちよせれ
又あかる世のぬしの

(四二) あんのつのけたちてたやれはがふじ

一 あんの、つのけだち、
あんの、おやけ、だち
ござるくの、てた、

たるでま、きちやれ
又けおのよかるひよ、
けおのきやかかるひよ
たうくそ、そちへ、
ひらくは、さうて

(四三) うらおそいふじ

一 ござるく、もり、みや、あければ、
あが、なさが
ちよわより、もちろちへ、
こかきよる、きよらや
又あかる、もりみや、あければ

(四四) うらおそいふじ

一 ちばな、かなぐまぐ

ちむな、いしぐま

もゝま、まぢうんいしぐすく

又けおのよかるひよ

けおのきやかかるひよ

(四五) うらおそいふし

一ちむな、こしだけよ

あんは、かみてづら、

かみや、あん、まぶれ

又ちばな、よしたけよ

(四六) うらおそいふし

一いけばるの、あぢの、

ひらた よど、まよわちへ

ほつむ、もり、みや、あげれば、

かけふさい、世のふさい、しよわれ
又くよのねのあぢの

きこゑ**大**ききみかなしおもろ**御**さうし

天啓三年 癸亥 三月七日

第三

(一) あおりやへがふし

一きこゑ、大ぎみぎや、

おぼつ ゑが、とりよわま、

首里もり、おれわちへ、

あちおそいしよ、きみそわて、

おぼつ、世は、みおやせ

又とよむ、せだかこが、

かぐらゑが、とりよわま

まだまもり おりわちへ、

あちおそいしよ、きみそわて、

おぼつ、世わ、みおやせ

又かいなで、大ごろた、

その、いゑやうぎ、

げよ、あて、あたおそいよ、

よりおれて、

あちおそいしよ、きみそわて、

おぼつ、世わ、みおやせ

又げらゑ、まごろた、

いせほこり、だよ、あてから、

おそいよ、つきおれて、

あちおそいしよ、きみそわて、

おぼつ世わ、みおやせ

又とし、みごせ、いくまは、

とこゑ、まぢかさ、

いけな、きみ、おろちゑ、

あちおそいしよ、きみそわて、

おぼつ世わ、みおやせ

又ゑが、世ごせ、させむは、

御事、まぢやさ、

(一)モ、火の
神心

四の五六
六の三
廿の四六

なりきよ、かみ、おろちゑ、

あちおそいしよ、きみ、そわて、

おぼつ、世わ、みおやせ

又あか、ぐちやが、ゆいづき、

あちおそいぎや、ゑりちよ、

たりろ、てゝ、させわちゑ、

あちおそいしよ、きみ、そわて、

おぼつ、世わみ、おやせ

(二) あおりへがふし

一首里大ぎみぎや、

この、ゑかの、よりおれや、

はゑよ、ぎやめ、

まぢよく、ちよわれ

又とよむ、國おそいぎや、

この、きらの、つきおれや、
すゑよ、ぎやめ

又あぢおそいちよ、

あよ、はゑてあまで、

まゑよ、ぎやめ、まぢよく

又たゝみきよと、

きむ、はゑて、あすで、

まゑよ、ぎやめ

又み物、きよら、あおらちゑ、

おぼつ、だけ、よきて、

まゑよ、ぎやめ

又國ふさい、おしたて、

かぐらもり、ひぐちへ、

まゑよ、ぎやめ、

又大きみよ、よしられ

てるかはに、のだてれ

まゑよ、ぎやめ

まぢよく、ちよわれ

(三) あおりやへがふじ

一きこゑ、せのきみぎや、

まゑ、とめて、おれわちへ、

いみや、からど、

おれなおちへ、あまぶ

又とよむ、くよ、とよみ、

ませねがて、おれわちへ、

いみやからど

又首里もり、ちよわる、

ゑぞにや、まゑ、あぢおそい、

いみやからど

(二)ア、てだ
か

校訂おもしろさうじ

又まだま、^アもり、ちよわる、

てだ^(二)の、ませ、うきゆ、くも、

いみやからど

又とし、七とせ、

おぼつ、だけおきつめ、

いみや、からど

又ゑが、八とせ、

まよりもり、まどおさ、

いみや、からど

又てるかはが、うざし、

さしぶ、おれなおちへ、

いみや、^アからど、

おれなおちへ、あまぶ

(四) かぐらごよでがふし

三の六二

一きこゑ大ぎみぎや、

ごよむ、せたかこが、

きみくしよ、よしれ

又いせゑけり、あぢおそい、

あが、かいなで、たみきよ、

きみくしよ、よしれ

又大ごろた、おより、

もりやゑこた、おなおさ、

きみくしよ、よしれ

又あけめつら、あおらちゑ、

てよりきよら、おしたて

又首里もり、おやのろ、

なよかさの、おやのろ

きみくしよ

又まかび、^アもり、おやのろ、

第三

みちゑりきよの、おやのろ

又よしもりの、おやのろ、

をづなりの、おやのろ

又たいらもりおやのろ、

みちゑり、きよの、おやのろ

又みよちよの、のろかみきよら

かみにしやの、そできよら、

きみくしよ

又きやのうち、もりぐをく、

いべの、いのり、しよわちへ

又いしらは、おりあげて、

いちやちや、げらへわちへ

又そのひやぶは、かなひやぶは、

つかさ、いのり、しよわちへ

又ましらは、つみあげて、

(三)モ、石垣
の異名

(一)モ、石垣
の事

(二)いた門の
事

(四)かれ門之
事

かなぢや、たてなおちへ

又おぼつより、かゑて、

けよの、うちよ、もどて、

きみ きみしよ

又てるかはわ、てりより、

てるしの、おしより、

きみくしよ、世しれ

(五) きみのつちがふし

一きゑゑ、きみがなし、

いづこ、しま、よりおれて、

なさいきよもい、あんどおそい、

あまこ、よりかわちゑ、

まなしやど、たちよる

又とよむ、きみがなし、

七の二一
九の二二

(一)御肝合ち
とこ

このみ、しま、つきおれて、
 なさいきよもい、あぢおそい
 又おぎも、うちよ、よしらす、
 大ぎみよ、しなより、
 なさいきよもい、あぢおそい
 又あよが、うちよ、おぼろそ、
 せだかこよ、まなよわ、
 なさいきよもい、あぢおそい
 又大ごろた、みまぶてそ、
 おぼつより、かゑれ、
 なさいきよもい、あぢおそい
 又もりやゑこた、あがなさま、
 かぐらより、かゑれ、
 なさいきよもい、あぢおそい
 又てるかはが、てるしのが、

(二)モ、日月
 のてるや、う
 にこ

(三)てりよる、やよ、
 おぎむ、うまれ わちゑ、
 なさいきよもい、あぢおそい
 あまこ、よりかわちへ、
 まなしやど、たちよる

(六) まより大きみがふし

一きこゑ大ぎみぎや
 だよむせだかこが、
 あんじおそいしよ、よしれ
 一ままうちゑか、とりよわちへ、
 何そいゑか、とりよわちへ
 又せくさ、せぢ、おろちへ
 又ひやくさ、せぢ、おろちへ
 又げらへ、大ごろた、

(一)モ、勢軍
 (二)モ、勢軍
 へ

校訂おもしろさうし

かいなで、まごろた、

あんじおそい

(三)モ、肝心

又(三)あよが、うちや、まちよく、あれ、

きもちよく、まだよ、あれ

又きみくしよ、まぶれ、

ぬしくしよ、まぶれ

又やまど、しま、いつこ、

まへほしの、くさら

(四)肝が内心

又(四)あよが、うちは、まよわちへ

きもが、うちは、まよわちへ

(五)両手語る

又(五)こむで、よいたうちへ、

あたす、よいたうちへ

又おきなまを、えめて、

へたなまを、えめて

又やまどしま、ぎやめむ、

やえるくに、ぎやめむ

又いと、わたちへ、かけわれ、

首里もり、かなて、

まだまもり、かなて

又いづこ、いのられて、

くさら、ほこられて

又きこゑ大きみぎや、

てるかえよ、えられ、

(七) かくらごよでがふし

一きこゑ大きみぎや、

ごよむせたかこが、

めづらしや、げよ、あよる

又(七)さしふ、おれほきて

むつき、おれなおちへ

(二)モ、神人

(二)モ、勢軍
(三)モ、同

(四)モ、世の
ため、其の
爲と申事も
有之に
(五)モ、上同
見合とめな
入目とす
見合對面す
る事、
(七)ア、向顔
事、
(八)モ、君に
快く被仰こ

又なさいきよもい、あんどあそい、
あが、かいなで、たゝみきよ
又せこさ、たち、しよわてゝ
せひやこ、たち、しよわてゝ
又大きみと、のたてゝ、
せたかこそ、いので
又あまよいしやや、あさよ、
あまの、まなしやよ、しよ
又おより、さて、おれわちへ
おなおさ、さて、おれわちへ
又あまこ、あわちへ、めづらしや、
みきやう、あわちへ、めづらしや
又いきやる、あよりもりが、
いきやる、まだまもりが
又きみよいしや、まれて、

ぬしよ、このまれて
又あんどあそいが、かけなし、
たゝみきよが、もちなし
又おぼつ、てゝ、さうせて、
かぐらてゝ、さうせて
又あかぐちやが、よいつき、
せるまゝが、よいつき

(八) かぐらごよでがふし

一きこゑ大きみぎや、
とよむせだがこが、
みしま、いのられゝ
又あよりもり、ちよわる、
まだまもり、ちよわる
又なさいきよもい、あんどあそい、

校訂おもろさうし

(一)モ、行合

(二)モ、舟の
異名

(三)モ、ほこ
らしや

(四)モ、眞う
れしや

(五)モ、舟

あが、かいなで、あんどおそい
又大ぎみよ、いきよて、

せだかこよ、いきよて

又(三) 忍そこ、なこよわちへ、

みおね、なこよわちへ

又あまの、(三) ところしやよ、

あまの、(四) まうれしやよ

又(五) 世ひきとみ、おしうけて、

せぢあらとみ、おしうけて

又世つきとみ、おしうけて

くもこととみ、おしうけて

又あまへとみ、おしうけて、

おしあけとみ、おしうけて

又たけくくに、いので、

もりノよ、いので

(六)モ、波の
こと

(七)モ、柔げ
てん

(八)モ、大濤
之事

(九)ア、と
めてん

(十)あらめと
いふ此字

は言葉の結
ん

又あおりや、とりよわ、やり、

ておりや、とりよわ、わ、やり

又忍そこかす、つけわちへ、

みおねかす、つけわちへ

又(六) 忍さん、(七) なごやけて、

あふなみよ、(八) ざやちへ

又おしうけかす、み、ま、ぶり、

くりうけかす、み、まぶり

又きみくしよ、(九) ゆしらめ、

ぬしくしよ、よしらめ

(九) かぐらふじ

一きこゑ大ぎみぎや、

あ、やま
まそたより、なちへ

いつこ、なげかたな

校訂おもしろさうし

又とよむせだかこが、

やしるまぢやよ、なちへ

又あがかいなで、あぢおそい、

せくさ、たてわやり

又あが、まぶるたゝみきよ、

せひやく、たてわやり

又あまみや、から、おきなわ、

たけてゝは、おもとな

又まねりや、から、みまま、

もりてゝと、おもとな

又よりあけもり、おやり、

あよなめさ、げよ、あて

又こがねもり、おやり、

ことなきめ、とねて

又とから、ひきたてゝ、

(一)モ、勢軍
こ

あわてゝよ、まぢやる

又まさけなよ、おしあけて、

つかてゝよ、まぢやる

又あから、せぢ、おるちへ、

まへほしやよ、まよわちへ

又ひぢゑる、せぢ、おるちへ、

おかまきやよ、ゆこちへ

又かまの、ねも、さりなおちへ

くめの、しま、おしあわちへ

又まさの、ねも、なおちへ、

かねの、しま、ひきあわちへ

又くめの、きみと、ゑよ、

おこと、やり、よわやり

又かねの、しま、のろく

せるまゝと、いので

又てるかはが、おしあわし、
てるしのが、もちなし

(一〇)

一ぢ天ごよむ、大ねし、

よるや、せぢ、^(二)ゑらたる

せぢやり、やまご、しま、ひぢめ

又^アだしま、ごよむ、わかぬし、

かなや、せぢ、^(三)ゑらたる

又^エゑよりもり、ちよわる、

ゑぞにやすへ、あぢおそい

又まだまもり、ちよわる、

てたがすへ、あぢあそい

せこさ、たてらかず、

うちやりやり、ごよめ

(一)申たると
いふ事

(二)モ、人名

又せひやこ、たてらかず、

ゑまより、まさよわれ

又げらへ、^(三)大ごろた

又きりさへも、つけるな、

かうさびも、つけるな

又はゝら、おしたて、

はやめよ、くちよ、ごめれ

又まぎけなよ、ぬきやげて、

あうやかたも、さけ

又けやる、よゝま、ごみ、

おしうけかた、み、まぶら

又せやる、おき、めづら、

くりうけかた、み、まぶら

又やまご、まへほしやの、

あよなめの、いつこ

又やしる、まへほしやの、
 ことなめの、おのつきや
 又せくさ、てゝ、たては
 ひせごめわちへついのけ
 又原そこ、てゝ、たては、
 よるやそこ、ついのけ
 又きもか、うちよ、おもわえ
 きもたりよ、あめれ
 又あよが、うちよ、おもわえ、
 たいちよ、おごちへ、まてれ
 又天が下、くよかき、
 大ぬしき、よあらめ

(一一)

一きこゑ大ぎみぎや、

ちやくよごみ、おしうけて、
 てるかえき、よしれ
 又ごよむせたかこが、
 世ゝせごみ、おしうけて
 又もゝまへよ、ぎやめむ、
 まへごまへて、おれわちへ
 又やそまへよ、ぎやめも、
 ませごまへて、おれわちへ
 又なさいきよもい、あぢおそい、
 ちやくよごみ、おしうけて
 又なさいきよもい、たゝみきよ、
 世ゝせごみ、おしうけて
 又おぼつぎやめごよで、
 ちやくよごみ、よせて

校訂おもろさうじ

(一三) かぐらふし

一きこゑ大ぎみぎや、
 ごよむせだかこが、
 おれなおちへ、かいなで
 又なさいきよもい、あぢおそい、
 あが、かいなで、たゝみきよ
 又まより、のろ、おや、のろ、
 なよかきの、おや、のろ
 又かねのもり、おや、のろ、
 みちりきよの、おや、のろ
 又よしもりの、おや、のろ、
 ごもゝまへの、おや、のろ
 又まきよゝの、のろゝ、
 あよそるで、いのて

又あけま、どし、むかえ、
 いまやも、よえ、かけおそて
 又むかか、おゑか、おしあけえ、
 おさうせ、やよ、おそて
 又このゑかの、よりおれや、
 いつよりも、まなしや
 又このきらの、つきおれや、
 いつよりも、おもかしや
 又あまみや、はぢめて、
 おぎもうちは、おまれて
 又まねりや、のだてゝ、
 あよがねが、まぐれて
 又きこゑ大ぎみしよ
 みしま、世え、よしれ

校訂おもしろさうし

(一三)

一よるやとよむ、大ぬし、
 だしま、とよむ、わかぬし、
 あんじおそいしよ、
 せぢ、まさて、ちよわれ
 又あからだけ、とよむ、
 まきみ、きよら、大ぬし
 又くもこだけ、とよむ、
 又またちめ、大れし
 又あまよこの、うらやて、
 けさよこの、きらやて
 又てるかたご、よきやて、
 おあご、あわしよわちへ
 又あよりもり、うち、あよで、

まだまもり、うち、あよで
 又あごにやまへ、あぢおそい、
 せだがをえ、わうよせ、
 又くもこ、だけ、おりあけて、
 又おりや、はな、つみあけて
 又あやこまや、ひちへ、
 よきのたけ、や、ひちへ
 又おきも、うちの、うまれて、
 あよが、おちの、まぐれて
 又あんじおそいぢよ、よきやて、
 又あまこ、あわちへ、そこで
 又よるや、せぢ、あらぎや、め、
 きみぎや、せぢ、あらがめ
 又天ぎやあた、おそて、
 又あよりもり、ふさて

(一四)

(一)モ、世の肝要成關といふ事へ

一きこゑ、あちおそいぎや、
大ぎみえ、のだてゝ、
まよりもり、げらへて、
おぼつ、よもつ、^(三)こで、
あちおそいよ、みおやせ
又ごよむわうませが、
せだかこゑ、のだてゝ、
まだまもり、げらへて
又いべの、いのり、まよわちへ、
くまなかの、もりよ、
世の、あしやて、
^(三)あおりや、たて、
おおりやあけて

(三)赤田御門の御獄事アよなし

(四)世添ふ閉

又^(三)つかさ、いのり、しよわちへ、
あがる、たけみや、くむたけ、
よつたけ、つみあげて
又まへつきぎや、
みもん、いちやちや、げらへて
又きみが、^(四)こで、世そう、^(四)こで
さしよわちへ
又あちおそいや、
いみやからど、
天ぎや下、
いごかけて、ちよわれ

(一五) あおりやへがふし

一きこゑ大ぎみぎや、
あまみや、世の、うぶ玉、

うぶだまは、いのるまど、よ、かける
又ごよむせだかこが

(一六) あおりやへふし

一きこゑ大ぎみぎや、

大ひらのいくさ、

けふ、みあがやり、

もゝそ、きりふせて

又ごよむせだかこが

又きこゑあんどおそいや

又ごよむあんどおそいや

(一七) 中城よしのうらふし

一大ぎみ、ごよむ、くよもりや、

そでたれて、かなわせ、

去まのぬし、世のぬし、なりよわめ

又去よりもり、あが、かいなで、たゝみきよ

又中よしの、ごよみうらの、あまた、

そでたれて

又しま中の、まへくよの、あまた

(一八) 大ぬしがてんごころがふし

きこゑ大きみぎや、

なで、おちやる、みやふさ、

ごよまちへ、おる去よわ

又くよもりぎや、なで、

又よなと、ばま、よりやけ、ばま、

おるしよわ、

又うち、まてる、かき、まてる、すりより

(一九) よきげらへふし

一大ぎみぎや、

いるのべよ、なしよわちへ、

君しなて、なよら

又せだかこが、

またまべよ、なしよわちへ

又けおの、よかるひよ

又けおの、きやくる、ひよ

(二〇) あおりやへがふし

一きこゑ大君ぎや、

あまみや、ゑか、ごりよわちへ、

なさいきよもいしよ、

くにごよで、ちよわれ

(二)モ、人名

又ごよむせだかこが、

まねりやゑか、ごりよわちへ

又さしふ、五ころよ、

ねがいわちへ、よりおれて

又さしふ、七ころよ、

このみ、よわちへ、つきおれて

又大(三)ころた、そこよりしや、

よりかしや、もりやへあた、

まうれしや、なさいきよもいしよ

又あんしおそいよ、よしられ、

あかぐちやよ、つきよわちへ

又大(四)ぎみよ、おがま

きみくよ、てづら

又おぼつたけ、おごかちへ

きみくぎや、ほこて

又てだが、おざしやれば、
首里もりふさて、

なさいきよもいしよ、
くよとよで ちよわれ

(二二) あおりやへふし

一きこゑ大ぎみぎや、

だしまきらなうちへ、

あちおそいしよ、

てるかはと、いのれ

又とよむせだかこが、

たきよりゑか、ゑらで

又なさいきよもい、あちおそい、

おぎも、うちに、ねがて

又あが、かいなで、たゝみきよ、

(一)モ、両手

七の四三

おさうせねよ、こので

又げらへ、大ころた、

(二)むで、そろよわちへ

又かいなで、まこるた、

みそで、そるよわちへ

又せんの、いのり、まよわちへ

まんの、よねんかよて

又あかごちやが、よいづき、

おぼつだけ、とよで

(二三) やくのきくたけがふし

一きこゑ大ぎみぎや、

きらなおちへ、

いけなきみ、よりおるちへ、

あちおそいしよ、

せぢ、まさて、ちよわれ

又ごよむせたかこが、

ゑがなおちへ、

なりきよきみ、つきおるちへ、

又とし七ど、させわちへ、

又よりもり、よりおるちへ

又とし八どせ、ねがて、

まだまもり、つきおるちへ

又いせゑけり、あぢおそい、

大ぎみは、のだて、

又あが、かいなで、わうよせ、

きみくくと、てづて

又てるかたが、まぶりよわちへ、

みしま、わうよせま、かけおそて

(二三) きみのつんしがふし

一きこゑ大ぎみぎや、

ゑが、ゑらびやり、おれわちへ、

あんじおそいしよ、

かけぶさて、ちよわれ

又ごよむせたかこが、

きら、ゑらびやり

又きこゑ天つぎぎや、

およりとて、おれわちへ

(二四) うちいてのちあがりのふし

一きこゑきみおそいや、

おれて、あまび、よわれと、

天より下の、せぢ、かふう、みおやせ

校訂おもみさうし

又せだかきみおそいや

又玄よりもりぐをく

又まだまもりぐをく

又大ぎみが、まぶらは、

きみくぎや、まぶらと、

あちおそいしよ、

かけぶさて、ちよわれ

(二五) あおりやへがふし

一きこゑ大ぎみぎや、

おほつゑが、とりよわちへ、

けおのうちと、おしあけて、

あちおそいしよ、

ともゝをへ、ちよわれ

又とよむせだかこが、

(二)モ、行合

かぐらゑか、とりよわちへ、

もちるうちと、つきあけて

又いけな、きみ、さきだて、

首里もり、おれわちへ

又なりきよ、きみ、いぐまちへ、

まだまもり、おれわちへ

又あちおそいとよきやて、

あまこ、あわちへ、あまて

又わうにせと、よきやて、

みかう、あわちへ、あまて

又きみくが、いのらと、

てるかはが、まぶらと

(二六) おしかけふし

一きこゑ大ぎみぎや、

せぢまさて、おれわちへ、

あぢおそいしよ、

きみぎや、せぢもちよわれ

又 ことよむせだかこが、

けおそわておれわちへ

又 ごとし、なおさ、ごりよわちへ

おぼつ、せぢ、いきやよわちへ

又 きら、なおさ、ごり、よわちへ

かぐら、せぢ、おろちへ

又 きみてづり、まどさ、

みもんあまび、めづらしや、

又 ぞよやまへ、あぢおそい

いみやからど、

せぢ、まさて ちよわれ

(二七) みしまいのられてがふし

一 きこゑ 大きみぎや、

ことよむせだかこが、

かぐら、ことよ

又 いきやる、あんじおそいが、

いきやる、たゝみきよが

(二八) かぐらふし

一 きこゑ 大きみぎや、

ことよむせだかこが、

おれなおちへ、かいなで

又 なさいきよもい、あぢおそい、

あが、かいなで、たゝみきよ

十二の一

(二九) おもろこのはらがふし

一きこゑ大ぎみぎや、

おれて あまび、よわれば、

のちあがりしよ、

世わ、^ア ちよわれ

又ごよむせだかこが

十二の二

(三〇) のちあかりのふし

一きこゑ大ぎみぎや、

みやがの、ひやし、

うちやがの、ひやし

又ごよむせだかこが

十二の三

(三一) おしかけふし

一きこゑ大ぎみぎや、

おれていのり、よわれを、

ままが、いのち、

おぎやかもいよ、みおやせ

又ごよむせだかこが

一の一

(三二) あおりやへがふし

一きこゑ大ぎみぎや、

おれて、あまび、よわれを

天が下、たいらげて、ちよわれ

又ごよむせだかこが

一の二

(三三) あおりやへがふし

一きこゑ大ぎみぎや、

おれて、あまびよわれを、

かみてだの、

まぶり、よわる、あちおそい

又ごよむせだかこが

(三四) あおりやへおふじ

一きこゑ大ぎみぎや、

世そう、せぢ、みおやせと、

千萬、世、そわて、ちよわれ

又ごよむせだかこが

(三五) あおりやへがふじ

一きこゑ大ぎみが、

天の、いのり、しよわれば、

てるかとも、ほこて、

おぎやかもいよ、

ままそゑて、みおやせ

又ごよむせだかこが

(三六) あおりやへふじ

一きこゑ大ぎみぎや、

あけの、よろい、めしよわちへ、

かたな、うちま、

ぢやぐよ、ごよみよわれ

又ごよむせだかこが

(三七) あおりやへがふじ

一きこゑ大ぎみぎや、

かぐらゑが、ごりよわちへ

あんじおそいま、

ごもゝまへ、ちよわれ

校訂おもしろさうし

又とよむせだかこが

(三八) あおりやへがふし

一きこゑ大ぎみぎや、

とたけ、まさよわちへ、

みれども、あかん、

まより、おやぐま

又とよむせだかこが

(三九) あおりやへがふし

一きこゑ大ぎみぎや、

けおの、せぢやり、よわを、

嶋まるくみこへ、まやり、おそわ

又とよむせだかこが

(四〇) あをりやへがふし

一きこゑ大ぎみぎや、

おれておれぶさよわ、

世、そろゑて、

おぎやかもいよ、みおやせ

又とよむせだかこが

(四一) たうやまがふし

一きこゑ大ぎみぎや、

いくさ、せぢみおやせ

又とよむせだかこが

(四二) あおりやへがふし

一きこゑ大ぎみぎや、

校訂おもしろさうし

ともゝご、さよ、しちへ、ちよわれ
又ごよむせだかこが

(四三) きこゑ大ぎみがいくさまちがふし

一きこゑたうやま、
大ぎみぎや、けやりよわ
又ごよむたう山やまよ

(四四) あおりやへがふし

一きこゑ大ぎみぎや、
かいなで、わる、あぢおそい、
かほうよる、みやかの、もり、ちよわれ
又ごよむせだかこが

(四五) あおりやへがふし

一きこゑ大ぎみぎや、

いのり、たてまつれば、
萬々、あまらまん、ちよわれ
又ごよむせだかこが

(四六) あおりやへがふし

一きこゑ大ぎみぎや、
せぢ大やが、うちがて、ちよわれ
又ごよむせだかこが

(四七) あおりやへがふし

一きこゑ大ぎみぎや、
まよりもり、おれわちへ、
おぎやかもいや、
きみしよ、まぶりよわれ

校訂おもしろさうし

又ごよむ、せだかこが

(四八) あおりこものあちのふし

一きこゑ大ぎみぎや、

せちごよも、せいくさ、

まま世の、ごよみ

又ごよむせだかこが

(四九)

一きこゑ大ぎみぎや、

ひやくさ、ぎやめ、

おぎやかもいしよ、ちよわれ

又ごよむせだかこが、

まだまもりおれわちへ

(五〇) あおりやへがふし

一きこゑ大ぎみぎや、

けお、ふらす、あめや、

きやの、うちみやま、

こがね、ふりみちへて

又ごよむせだかこが

註。尚豊王の御世崇禎十三年庚辰年七ヶ月雨降積水溢之時此おもしろとあよりおわるとのこと云
おもしろ貳ふしがらめき(仕)候間則雨止たるよしなり米次親雲上二十五歳之時と直傳承る

(五一) あおりやへがふし

一きこゑ大ぎみぎや、

まけうちあや、あまをちへ、

ちよらの、さなの、

さいわたるみもん

又ごよむせだかこが

一の二一

(五二) あおりやへふし

一きこゑ大ぎみぎや、

ま(二)まうちとみ、おしうけて、

かぐらの、て(三)よりごみる、かよ、ある

又ごよむせだかこが

(一)モ、舟の
異名
(二)モ、船の
異名

一の二二

(五三) きこゑ大ぎみぎやみてつからいのりがふし

一きこゑ大ぎみぎや、

みかなしけ、あんじおそい、

浦うらと、ゑ(三)んざしき、ちよわれ

又ごよむせだかこが

(一)モ、同座
敷いふこと

一の二四

(五四) あおりやへがふし

一きこゑ大ぎみぎや、

おれて、おれなおしよわ、

あぢおそいよ、

世がほう、みおやせ

又ごよむせだかこが

一の二五

(五五) あおりやへがふし

一きこゑ大ぎみぎや、

はぢめ、いくさ、たちよわちへ、

あおて、いきやり、

かたきひぢめわちへ

又ごよむせだかこが

一の二六

(五六) あおりやへがふし

一きこゑ大ぎみぎや、

世かけせぢ、おるちへ、

校訂おもしろさうし

あちおそいも、

まゑまさて、ちよわれ

又とよむせだかこが

(五七) あおりやへがふし

一きこゑ大ぎみぎや、

あまへ、わちへからわ、

(二) なさいきよもいよ

(三) ちまが、のち、みおやせ

又とよむせだかこが

(五八) あおりやへがふし

一きこゑ大ぎみぎや、

世かほう、もりよ、

まま世、そろいわちへ

一の二七

(一)モ、時之
主上の御事

(二)モ、萬々
世まで長久
に御座有と
いふ事

一の二八

一の三〇

又とよむせだかこが

(五九) うらおそいおもろのふし

一きこゑ大ぎみぎや、

あめもらん、もりや、

のちあがるしよ、

世と、ちよわれ

又とよむせだかこが

(六〇)

一よなと、ばま、

きこゑ、大ぎみ、

やちよ、かけて、

とよまさよ

又(二)あきかぐち、

(一)輿論の大
事なり

校訂おしるさうじ

ごよも大きみ

やぢよ

(六一) よきけらへふじ

一 大きみくにおそいきみ、

世がほう、まがほう、みおやせ

又かみまものくよかすの

(六二) かぐらふじ

一 きこゑ大きみぎや、

ごよむせたかこが、

きみくゝまよ、よしれ

又いせゑけり、あぢおそい、

あが、かいなで、たゝみきよ

(六三) あおりやへがふじ

一 きこゑ大きみぎや、

さしふ、おりなおちへ、

あぢおそいまよ、

ともゝまへ、

まゑ、まさて、ちよわれ

又ごよむせたかこが、

むつきおれふさて

(六四)

一 大きみぎや、まぶる、

てだがまへ、あぢおそい、

天下また、

まへまさて、ちよわれ

校訂おもしろさうし

又せだかこが、みまぶる、
もゑまさる、わうよせ

五八

河おりやへさあかさのおもろ御さうし

天啓三年 癸亥 三月七日

第四

(一)モ、世界

(二)モ、世界

(一)モ、空

(一) あおりやへがふし

一きこゑ、あおりやへや、

いけな、なりかわて、

えよりもり、おれわちへ、

かぐらせぢ、

あんじおそいよ、みおやせ

又ごよむ、あおりやへや、

なりきよ、おれりかわて、

まだまもり、おれわちへ

(二) きこゑ大ぎみのふし

一きこゑ、あおりやへや、

かぐらの、えけうち、

あやよりも、ふれまで、

校訂おもしろさうじ

おぎやかもいよみおやせ

又ごよむ、あおりやゑや

(三) あおりやへがふじ

一きこゑ、あおりやへや、

せぢ、まさて、あそべば、

て^(二)るかたが、てりよる、やよ、きよらや

又ごよむ、あおりやゑや

(四) あおりやへふじ

一きこゑあおりやへや、

世の、まさて、

よの、つんし、

かみてだの、せぢ、

もちやり、ちよわれ

(一)モ、てだ
の事
(二)モ、様に

又ごよむ、あおりやへが

(五) あおりやへふじ

一きこゑ、あおりやへ^{アタシ}が、

けさよりや、まさり、

またま、こがね、

もち、みちろ、ぐまぐ

又ごよむあおりやへが

(六) あおりやへふじ

一きこゑ、あおりやへや、

まけうち、あや、かけわちへ、

ちよらの、さなの、

さい、わたる、みもん

又ごよむあおりやへや

(七) きこゑ大君のみやかかのひやしがふし

一きこゑ、あおりやへや、
ぐまぐ、おどん、けらへて、
かぐらの、けおの、うちよ、ある
又ごよむあおりやへや

(八) あおりやへふし

一きこゑ、あおりやゑや、
あがるいの、こがね、あな、
こがね、さなの、さきよれば、
あおりやゑや、
おれよみぎや、おれわちへ
又ごよむあおりやゑや

(九) あがるへの大ぬしきこゑくませりきよがふし

一きこゑ、あおりやゑや、
ち天の、せぢ、おろちへ、
おぎやかもいよ、みおやせよ、
ごもご、ま、ちよわれ
又ごよむあおりやゑや

(一〇) おちいてまあおりやへがふし

一きこゑ、あおりやへ、
もゝあぢより、まさる、
なさいきよもい、ごよまちへ
あおりやゑ、つかい
又ごよむあおりやへや

(一一) かつれんいなおまぎやたとわるがふじ

一 おおりやへや、

なさいきよ、おやまよわちへ、

きみの、つんし、つかい

又くよもりぎや、なさいきよ

(一二)

一 きこゑ、あおりやへや、

去まうち、きみやれを、

あおりやゑや、

去まうちゑぎや、おれわちへ

又ごよむあおりやへや

(一三) あおりやへふじ

一 きこゑあおりやへや、

中かみよ、てづて、

あぢおそいしよ、

てづて、ふさよわれ

又ごよむ、あおりやへや、

かな、ひやぶよ、てづて

(一四) あおりやへふじ

一 せりよさよ、ごよむ、

きこゑ、あおりやへや、

あぢおそいよ、

くよ、てもち、みおやせ

又去への、きみやれば

ふさい、きみやれば

(一五)

一きこゑ、あおりやへや、
なさいきよ、かなしけや、
よがほう、かなふくよ、ちよわれ
又ごよむ、あおりやへや

(一六) ねいしまいしがふし

一きこゑ、あおりやへや、
なさいきよが、よそいるもり
又ごよむ、あおりやへや

(一七) あおりやへふし

一きこゑ、あおりやへや、
千萬の、もちよる

おぎやかもいしよ、
かけて、ふさよわれ
又ごよむ、くよもりが、
千萬のもちよる、
おぎやかもいそ

(一八) あおりやへふし

一きこゑ、あおりやへが、
いけな、なりかわて、
えよりもり、おれわちへ、
かぐら、せぢ、
あぢおそ、いよ、みおやせ
又ごよむ、あおりやへや、
なりきよ、おりかわて、
まだまもり、おれわちへ

(一九) おしかけがふし

(一)モ、國求
てこ

一 きこゑ、あおりやへへ、

(二) せへごめて、おれわちへ、

わかきよもいよ、

よかけせへ、みおやせ

又ごよむ、くよもりぎや、

(三) ませ、ごめて、おれわちへ

(二)モ、國求
てこ

(二〇) あかんこがふねたてがふし

十六の一

一 あおりやへが、みやの、ごよみ、

ほちほこる、おみやの、ごよみ、

又せたかこが、みやの、ごよみ、

ほんじほころ、おみやの

(二一) きみがなしがふし

(一)モ、昔こ

一 きこゑあおりやへや、

(二) けさよりや、まさり、

えよりもり、もちなちへ、

けおの、うち、

もちよる、なちへ、ごよま

又ごよむ、くよもりぎや、

(三) むかよりや、まさり、

まだまもり、もちなちへ、

けおの、うちよ、

もちよる、なちへ、ごよみ

(二二) 老きうちあぢおそいがふし

(一)きみの事

二十二の一三

(二)モ、昔こ

一 きこゑ、さすかさが、

もゝご、ちよわれ、

あぢおそい、のちまさり、

百あぢ、なおまよわれ

又とよむ、さまかさが

又きこゑ、あぢおそいが

(二三) うちおアいもイごちよわれがふじ

一きこゑ、さまかさが、

ままうち、あんじおそいや、

きみしゆ、よの、くき、さゝまへ

又とよむ、さまかさが

又おぼつ、おわちへ、やちよを、

首里もり、まぶらに

(二四) あおりやへふじ

一きこゑ、さまかさが、

おれて、いのり、よわれむ、

をゑまさて、

よださちへ、ちよわれ

又とよむ、さまかさが

又まよりもりぐまぐ

又まだまもりぐすく

(二五) あおりやへふじ

一きこゑ、さまかさが、

とよむ、大きみや、

もゝまま、そろへやり、みおやせ

又とよむ、さまかさが

又まよりもり、いのらよ

又まだまもり、いのらよ

又きこへ、あぢおそいや
又ごよむ、あんじおそいや
又けお、まさり、あぢおそい
ふた、まさり、あぢおそい

(二六) あおりやへふし

一きこゑ、さむかさが、
ごよむ、大きみや、
さむかさが、
なさいきよもい、まぶら
又ごよむ、さむかさが

(二七) たいらのこのふし

一きこゑ、^{ア、}さむかさが、
ごもゝご、さよして、ちよわれ

又ごよむ、さむかさが、
去よりもりぐまぐ、
まだまもりぐまぐ

(二八) 首里もりのぼていけむがふし

一きこへさすかさが、
せち、やはは、たよ又たよ^{ア、}
又ごよむ、さむかさが
又くめ、げまよ、きよやせ
又かき、ごなき、みれつな

(二九) 去よりもりのぼていけむがふし

一きこゑ、さむかさが、
ゑ、け、せい、やりよわ
又ごよむさむかさが

(一)モ、實の

又志ま中の、わかいきよた、
まさの、きも、そろ

(三〇) たくしたらなつけのふし

一きこへ、さまかさが、
きみほこり、
ふう國、うちよせれ
又ごよむ、さまかさが
又首里もりぐをく、
まだまもり城

(三一) ねいしまいしのふし

一きこゑさまかさが、
ひやしの、つち、うたえ、
き、かなしけさ

又ごよむさすかさが
又志よりもりぐすく
又まだまもりぐすく

(三二) きこゑおしかさがやちよこたよまらせかふし

一きこゑさまかさが
よ、そわる、あやご
又ごよむ、さまかさが
又もり、おごちやえ、さだけで

(三三) よそわるあやこのふし

一きこゑさまかさが、
こへやて、おぎもやま
又ごよむさまかさが

(二)モ、など
り

同五〇

(三四)

一 きこゑさをかさが、
 あまへわちへ、あまびよわ
 又 ごとよむ、さをかさが
 又 けおの、うちえ、をしあけて、
 さんこおり、つきあけて
 又 煮よりもり、おれわちへ
 又 まだまもりおれわちへ

(三五) くまこよでがふし

一 きこゑ、さすかさが、
 ともゝと、とやせ、おれわ
 又 ごとよむさをかさが、ともゝと
 又 煮よりもりぐすく

又 まだまもりぐすく

(三六) まへのひやしがふし

一 さをかさ、さをかさ、
 ごとよみ、われ
 又 煮、ミ物、よせま、つなり
 又 きみの、あんじ、あぢま

(三七) まつなりおふし

一 さをかさよ、
 又 煮の、ひやし、
 又 めづら、ひやし、みおやせ
 又 きみのあんじよ

(三八) 大やこがふし

一きこゑ、さをかさが、
だくよ、とよで、おれわちへ
又とよむさをかさが
又とよむさをかさが
又とよむさをかさが
又まだまもりぐすく

(三九) くまごよでがふし

一きこゑさをかさが、
もゝをへ、これ(ど)とよむ
又とよむさをかさが
又とよむさをかさが
又とよむさをかさが
又とよむさをかさが
又まだまもりぐすく

(四〇) たくしたらなつ(け)のふし

一きこへさすかさが、

つゞみの、あちなり、かなし、
ふうくよ、うちよせれ
又とよむさをかさが

(四一) ねいしま石のふし

一きこへさすかさが
あちの、つち、なさいきよ
又とよむさをかさが

(四二) あおりやへふし

一きこへさすかさが、
よがほう、あまへ
又とよむさをかさが

(四三) うらおそいふし

一いとかわの、もりよ、
さすかさが

嶋なふし、おれわちへ

又おやかわの、もりよ

又おろく、よこだけよ

(四四) あおりやへふし

一きこへ、さすかさが、

もちろかちへ、あまべば、

もゝまへ、おぎやかもししゆ、ちよわれ

又ごよむさすかさが、

又(二)いしゑけり、あちおそい

又てだが、うざし、ちよわれ

又ゑぞにやまへ、あちおそい、

いちる、うざし、ちよわれ

(二)モ、勝り

(二)モ、様に

又かわるめの、さうちよ、

きこほこり、げらへて

又まより、もりぐすく、

きらのかた、おれらよ

又まだまもりぐすく

月のかた、おれらよ

(四五) うらおそいふし

一きこゑ、さすかさが、

おこのみの、たかさ、

あけぐもの、あさひさをや(二)

又ごよむさすかさが

(四六) あおりやへふし

一まよりもり、ちよわる、

校訂おもしろさうし

きこへ、あぢおそいや、

ひやくさ、のち、

いので、みおやせ

又まだまもりぐまぐ

(四七) ねいしまいしのふし

一きこへ、さすかさが、

あがるいよ、かよて

又ごよむ、さすかさが、

てだがあなよ、かよて

(四八) あおりやへふし

一きこへ、さすかさが、

けおの、うちは、おしあけて、

志よりもり、おれわちへ、

(一)モ、天次
王がなしん
尙清王加那
志之神御名

(二)モ、めつ
らしやこ

(三)モ、王が
なしの御事
こ

(四)モ、てだ
の事こ

きみぎや、こがねをへ、

天つぎよ みおやせ

又ごよむ、大きみぎや、

もちろ内と、つきあけて、

またまもり、おれわちへ

又年三ごせ、なるぎやめ、

まだまもり、おもかしや

又志よりもり、かけふせる、

てよつぎの

又またまもり、志きふせる

又てるかたが、あがる、やよ、

てりおそて

(四九) ね石ま石のふし

一きこへ、さすかさが、